那覇市文化財調査報告書第25集

安謝西原古墓群

――安謝高架橋立体化工事に伴う緊急発掘調査報告書――

1993年3月

那覇市教育委員会

那覇市文化財調査報告書第25集

安謝西原古墓群

——安謝高架橋立体化工事に伴う緊急発掘調査報告書——

1993年 3 月

那覇市教育委員会

上：仏飯器

中：小碗

下：碗

序

この報告書は安謝高架橋工事に伴う埋蔵文化財「安謝西原古墓群」の緊急発掘調査の成果を記録したものです。

わが那覇市と県内各市町村をつなぐ交通体系の課題は多く、その解決をめざして種々の対策を講じられているところであります。

その一つとして、沖縄本島の大動脈である国道58号の安謝交叉点における高架橋工事を進めていたわけでありますが、その造成工事中に埋蔵文化財「安謝西原古墓群」が新たに発見されました。

その取り扱いについて、当教育委員会としましては関係機関と遺跡の現地保存について協議を重ねてまいりました。しかし、高架橋工事計画の変更が極めて困難であり、やむを得ず記録保存の措置をとることとなった次第であります。

さて、その調査より琉球王国時代の葬墓制を考える上で貴重な遺構・遺物が数多く出土しました。とりわけ、第3号遺構と碑文の発見は琉球史上に残る「島津の琉球入り」の際活躍した三司官の一人名護良豊のものでありました。この発見は歴史上の人物名護良豊に関する新たな資料を提供したものと考えています。その他にも、厨子甕・輸入陶磁器・肥前系の焼物等が得られました。そのことより、この地が遙かな時代より先人たちの霊地であったことがうかがえます。

この報告書が「安謝西原古墓群」を理解していただくとともに、広く埋蔵文化財に対する認識と理解を深める資料として活用されることを願ってやみません。

末尾になりましたが、発掘調査に協力していただいた馬姓小禄家のみなさま、その他多くの関係者の方々の多大なご協力に対して深く感謝を申し上げます。

平成5年3月

那覇市教育委員会
教育長　嘉手納　是　敏

例　　言

1．本書は、1990年に実施した安謝西原古墓群の緊急発掘調査の成果をまとめたものである。

2．調査は「安謝高架橋立体化工事」に伴うもので沖縄総合事務局南部国道事務所の依頼を受けて、那覇市教育委員会が実施した。

3．発掘調査にあたって、㈱大城組には多大な御協力を頂きました。記して謝意を申しあげる次第である。

4．陶磁器については、九州陶磁文化館の大橋康二氏より御教示をいただいた。記して謝意をあらわす。

5．名護良豊の碑文の解読は、那覇市文化財調査審議会の阿波根直孝氏と那覇市文化振興課の島尻克美氏による。記して感謝を申し上げる次第である。

6．発掘調査並びに資料整理・報告書作成には、馬姓小禄家の皆さんには多大な御協力をいただきました。記して感謝を申し上げる次第である。

7．石棺・遺骨については、馬姓小禄家の新築の墓（ナナユーヒの墓）に納められている。

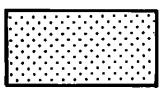
8．本書に掲載した国土基本図は国土地理院の発行のものを複製した。

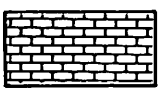
9．遺物撮影と現象・焼付は金武正紀・栗山初美・比嘉君子であたった。

10．本書の執筆は第Ⅴ章を古塚達朗による。その他の執筆・編集はすべて島が行った。

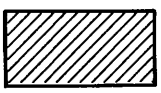
11．その他の発掘調査で得られた資料は、那覇市教育委員会文化課で保管されている。

（凡　　例）


漆　喰


岩　盤

セメント


土

目　　次

序

例言

第Ⅰ章　調査に至るまでの経緯 …… 1

(1)　調査に至るまでの経緯 …… 1

(2)　調査体制 …… 1

第Ⅱ章　位置と環境 …… 2

第Ⅲ章　調査経過 …… 6

第Ⅳ章　調査の内容 …… 7

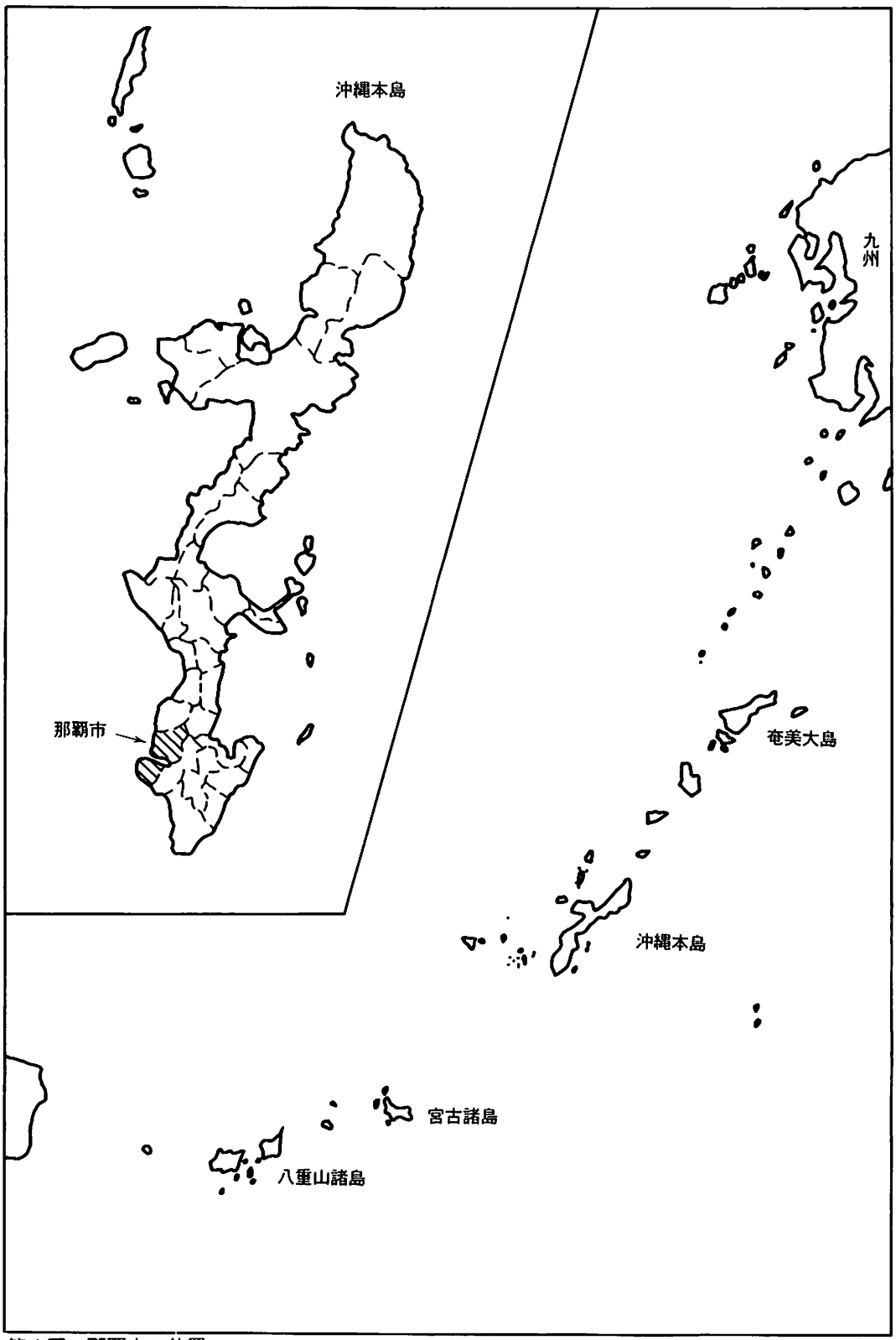
1．第1号遺構 …… 7

2．第2号遺構 …… 20

3．第3号遺構 …… 20

第Ⅴ章　名護良豊について …… 37

第Ⅵ章　まとめ …… 39



第１図　那覇市の位置

第Ⅰ章　調査に至るまでの経緯

(1)　調査に至るまでの経緯

沖縄総合事務局南部国道事務所では、沖縄本島南部地区の道路網整備事業に伴い国道58号と県道28号の交わる安謝交叉点の高架橋道路を計画し、平成元年度に造成工事を進めていた。

ところが、平成元年12月４日に当事務所より那覇市教育委員会に石碑と古墓が発見されたとの情報が伝えられた。

その石碑と古墓について現場調査したところ、「1609年の島津の琉球入り」に活躍した名護良豊に関する碑文と古墓であることが確認された。このことは、ただちに沖縄総合事務局南部国道事務所に伝えられ、その取り扱いついて協議調整が行われた。

その結果、当教育委員会より調査員を派遣して、本古墓群の記録保存のための緊急発掘調査を実施することになった。

調査は平成２年３月14日より開始された。

(2)　調査体制

発掘調査および調査報告書作成は次の体制により実施された。

事業主体	那覇市教育委員会		教育長	山田　義良	(平成元年度)
			〃	嘉手納是敏	(平成２～４年度)
事業所管	那覇市教育委員会	文化課	課　長	浦本　茂則	(平成元年度)
			〃	仲田美加子	(平成２・３年度)
			〃	高江洲　隆	(平成３・４年度)
			主　幹	金武　正紀	(平成２～４年度)

事業事務

文化係係長	東恩納隆栄	(平成元年度)
〃	新城　和範	(平成２～４年度)
主事	吉峯なおみ	(平成２・３年度)

発掘調査員	主事	島　弘
	〃	内間　靖
	〃	玉城　安明

発掘調査作業員

阿波根栄子・新垣さゆり・井上華寿美・大城奈々・加島　治・具志堅修

島袋節子・楚南育子・当銘由嗣・渡慶次和子・名渡山静香・宮城博子

与那覇岳

資料整理員及び協力者（洗浄・注記・実測・トレース等）

比嘉君子・外間まゆみ・城間千栄子・栗山初美・宮良文子・大城園美

儀間律子・宮城かの子・金城秀美・諸見里浩子

第Ⅱ章　位置と環境

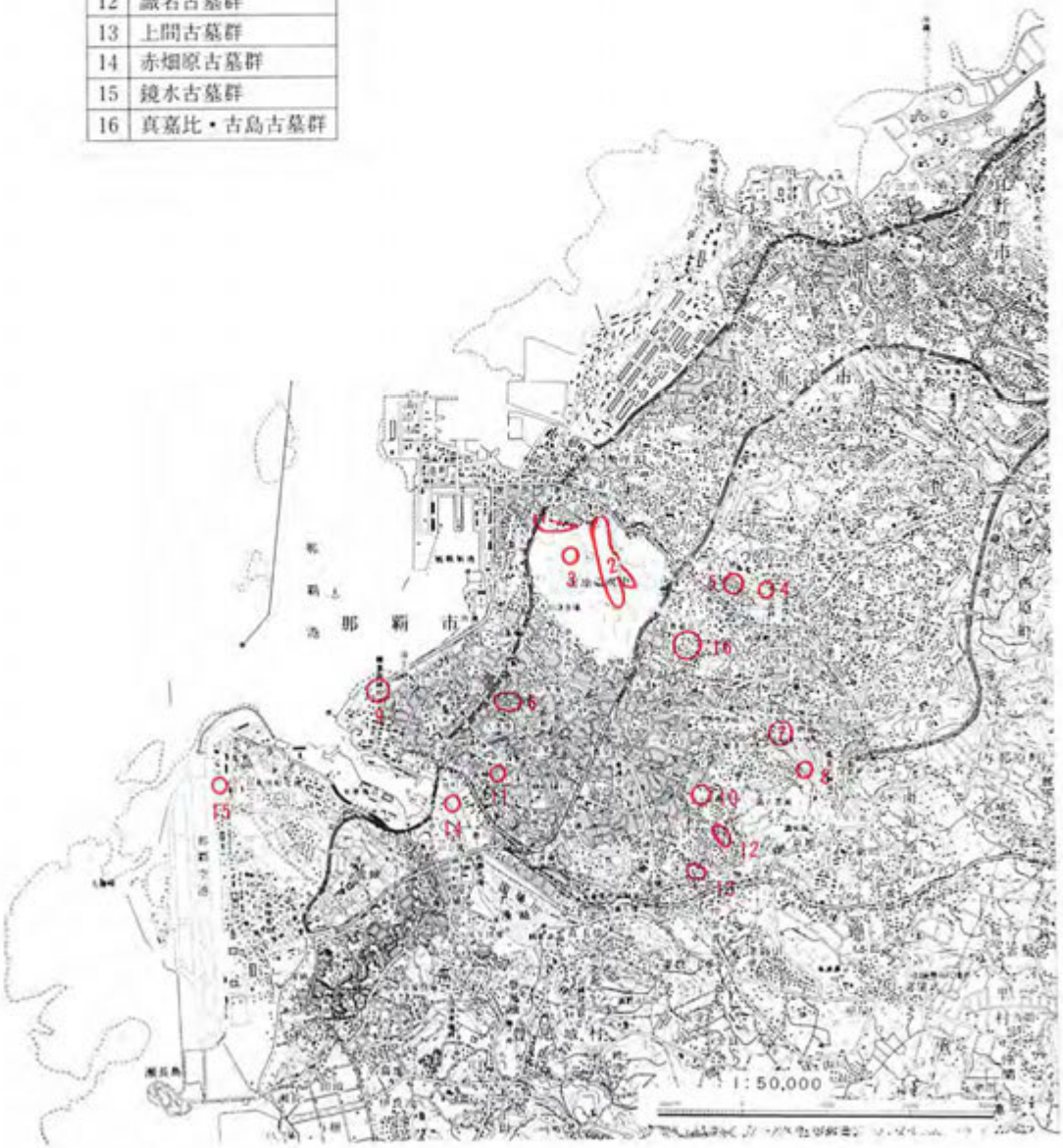
安謝西原古墓群は那覇市安謝に所在する。那覇市は東シナ海に面した沖縄本島南西部にあり、東に西原町、東南に南風原町、南に豊見城村、北に浦添市と接する県下第１の都市である（第１図)。本市は、ほぼ略三角形を呈し東西に約11㎞、南北に約８㎞を測り、総面積37.81㎞である。地形的には、東シナ海側の平野部とそれを取り囲む琉球石灰岩の台地に大きく分けられる。

安謝はその琉球石灰岩台地と安謝川に狭まれた一帯にあり、９つの小字より成り立つ。本市の最も北に位置し、安謝川を狭んで浦添市に接する。戦前の周辺の地形は、安謝橋あたりから北西側（現在は埋め立て地）は海岸線が延びて海と川のある風光明媚な純農村地帯である。また、戦前から、この一帯は那覇市と中・北部との交通の要所でもある。ところが、戦後安謝新港の建設や埋め立ての工事や交通の発達に伴い急激に住環境が変わりつつある。さらに、南接していた米軍の住宅地（天久地区）が解放され、現在「那覇新都心開発事業」が推し進められている。これからも、安謝地区の環境はかなり変動するものと思われる。

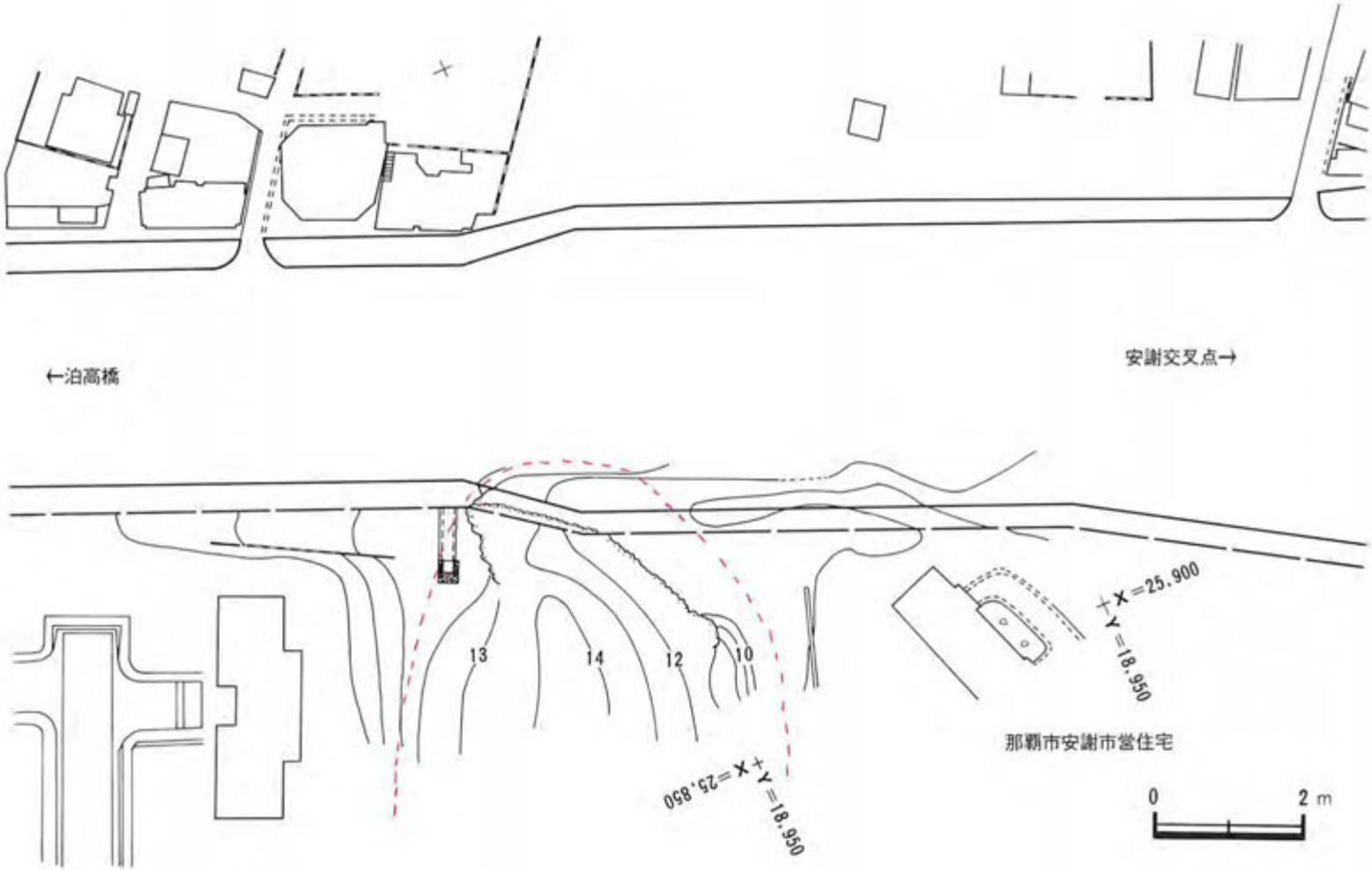
さて、遺跡の立地している西原は、安謝の南側の一帯に展開する。古墓群はその東西に延びてる琉球石灰岩（地元の人は名護毛と呼んでいる）の崖下に所せましに占地する。今回発見された古墓もこの一角の西側に立地する。このことより、一帯が少なくとも近世もしくはそれ以前からの墓地地帯として利用されていたと思われる。

ところで、第２図に市内の主要な古墓を示した。今後、他の古墓群との比較研究等が進むことによって、本古墓群の歴史的環境がより明確になるものと思われる。

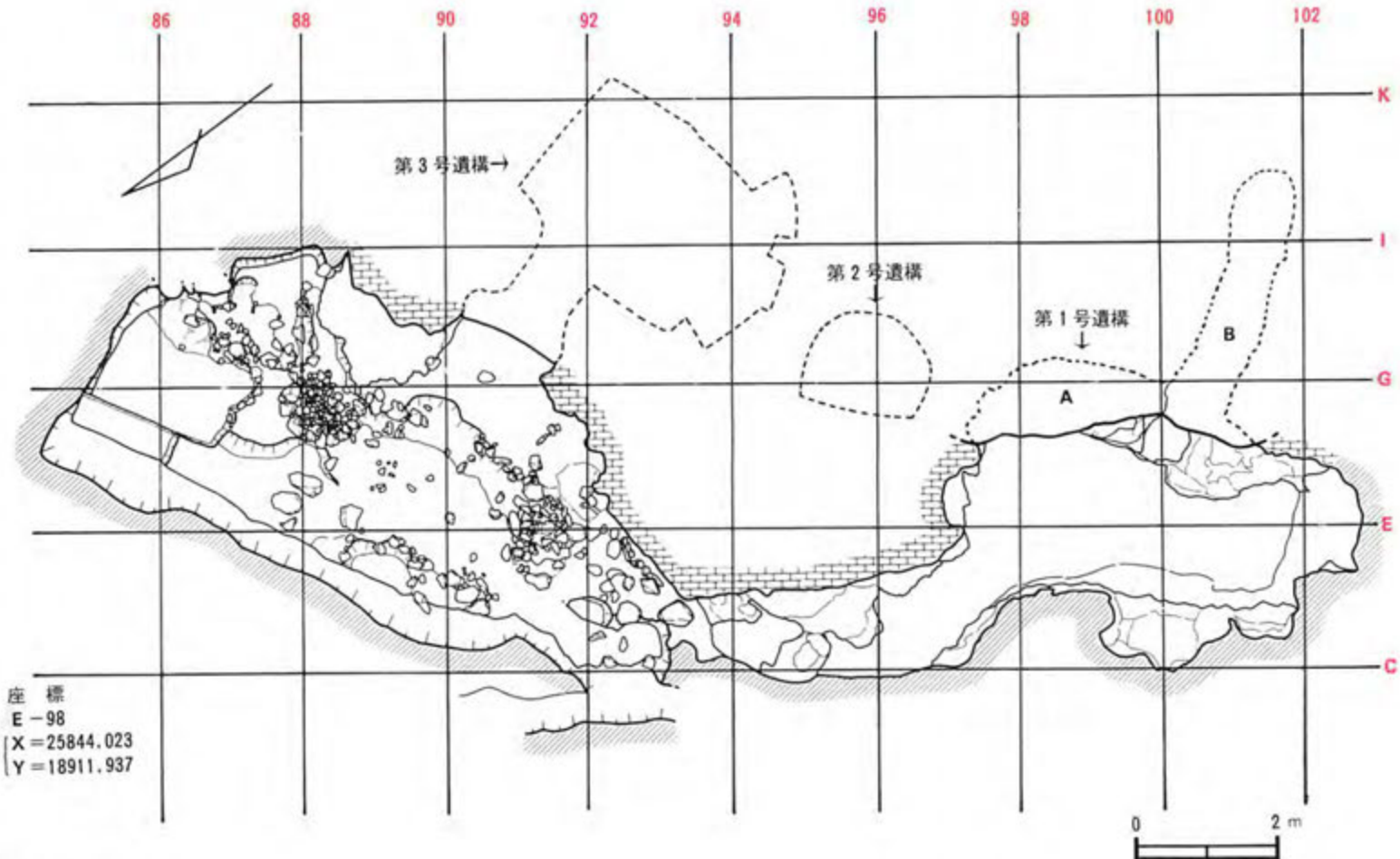
No.	遺　跡　名
1	安謝西原古墓群
2	銘苅古墓群
3	ナチュー毛古墓群
4	上流古墓群
5	首里大名古墓群
6	ナイクブ古墓群
7	金城町フチサ古墓群
8	ハナンダー墓地群
9	辻　原
10	ケブンジャー古墓
11	城岳古墓群
12	識名古墓群
13	上間古墓群
14	赤畑原古墓群
15	鏡水古墓群
16	真嘉比・古島古墓群



第２図　那覇市の主要な古墓群の位置



第３図　安謝古墓群の位置


86
88
90
92
94
96
98
100
102
K
I
G
E
C
第3号遺構→
第2号遺構
第1号遺構
A
B
座　標
E－98
X＝25844.023
Y＝18911.937
0
2 m

第4図　遺構設定図

第Ⅲ章　調査経過

発掘調査は1990年３月14日～３月30日の約２週間実施した。本古墓群は、第Ⅰ章でも述べたように、安謝高架橋の造成工事中に発見された遺跡である。

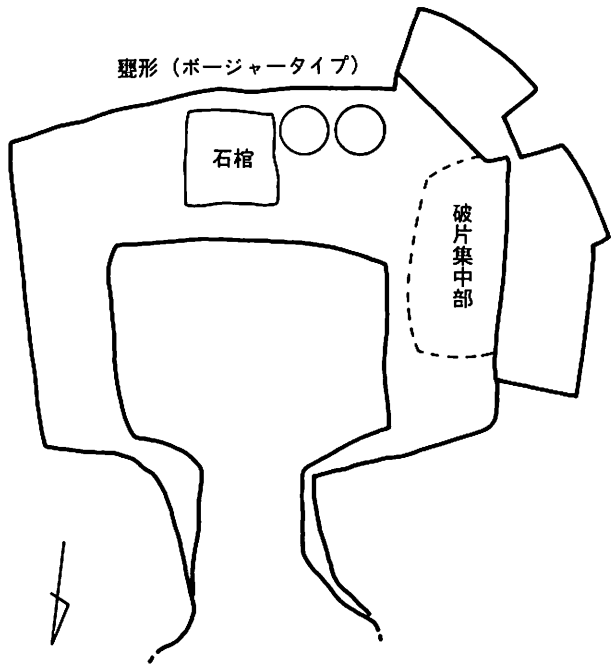
発見当時、遺跡の前庭部及び墓室内はかなり破壊された状況であった。そのため、調査は僅かに残された前庭部と墓室内を中心に行った。

遺構は発見時に３基確認されたので、南側より北側向けに第１号遺構・第２号遺構・第３号遺構と呼称した。さらに、実測のための1ｍ方眼を、調査区全体に設定した。東西にアルファベット、南北に算用数字を示した。（第４図）

調査は遺構前面におおっている盛土の除去より開始した。その後、第１号遺構→第２号遺構→第３号遺構と順次発掘・写真撮影・実測を繰り返し進めた。発掘調査が終了したのが、３月30日であった。

ところで、第３号遺構の墓室内の遺骨・納骨器等については、既に工事関係者によって移送されていた。墓室内の状況は下図に示したとおりで、中央～右奥にかけて納骨器が３基、右側には遺骨と納骨器（カメ形）の破片が散乱していたとのことであった。

なお、第３号遺構の墓室内については、琉球石灰岩の岩盤に亀裂が顕著にみられ危険なため調査期間中は保留した。その後、墓室内の補強を行い、改めて同年７月３・４日に墓室内の調査を行った。



第５図　第３号遺構・発見時墓室内状況図

第Ⅳ章　調査の内容

本古墓群は、琉球石灰岩の崖下に形成されたものである。遺構は第Ⅰ章でも記したように、工事中に発見されたものである。特に、第1・2号遺構の保存状態が著しく悪く、かろうじて第3号遺構の外観及び墓室が残っている状況であった。

そこから得られた資料は、第1表に示すとおり僅少であった。その殆どが破片で得られたが、僅かに完形品も見られた。出土遺物については、器種別に観察事項を報告する。

第1号遺構

(1) 概要

本遺構は、調査区の南側に位置し、主軸を北西に向ける。遺構は僅かに残った内室（A）と右奥壁のトンネル状の遺構（B）とその前面に広がる広場によって構成される。A・Bには重複関係がみられ、Aを掘込んだ後に、Bを新たに掘削したようである。本遺構については全体の形状が著しく破壊されており、古墓を2次的に使用したのか、それとも全体がトンネル状と一体をなすのか判然としなかった。今回はとりあえずA・Bに分け報告する。

Aは正面を方形、平面を長方形に掘込んだものである。奥壁には、底面から約75cmの高さの壇を設ける。BはAの右奥壁をトンネル状に掘込んだもので、高さ160cm、幅65cm、奥行き450cmを測る。奥へ徐々にすぼまる形状を呈していた。そのA・B遺構の前面には隅丸方形の広場が展開し、さらに北西隅より琉球石灰岩の岩盤に沿って通路状に北側へ延びる。その底面は、全面セメント張りである。また、その通路の岩陰に沿って半洞穴が見られたが、判然としなかった。

(2) 出土遺物

A・Bの内室より出土した資料は、納骨器・甕・壺・瓦・碗・古銭等である。

以下、Aより略述する。

A

(a) 納骨器（第10図2・3，第11図2～4）

甕形が2点得られた。口縁部を内湾させ、肩部の張る器形である。口縁部は玉縁状を呈する。沖縄で一般に「ボージャージーシ」と通称されている。

第10図2は光沢のあるあずき色の釉薬を外面に施したものである。頸部に3条の沈線を巡らす。素地は茶褐色で、わずかに亀裂・気泡と石灰質粒が見られる。口径27.6cmを測る。

同図3は無釉で「ボージャージーシ」の典型的な例である。沈線を頸部に2条巡らし、さ

らに肩部の上下にはそれぞれ2条施し空白を設ける。肩部から胴部にかけて蓮華文を描く。素地は明茶褐色を呈し、僅かに気泡と石灰質粒が見られる。口径24.6cmを測る。

第10図4は褐釉陶器の胴部片である。表面に約8mmのレンズ状の打割痕が2cm間隔で8ヶ所確認される。標品は納骨器用に胴部を打ち割るための目安痕と考えられる。興味深い資料である。

第11図2～4に納骨器（甕形）の蓋を示した。同図2の標品は、頂部を平坦につくる笠型のものである。裏面には墨書きによる「　　年戌子九月二十四日　　」の銘書が記されている。素地は明茶褐色を呈し、気泡や石灰質粒が散見できる。口径23.6cm、器高6.9cm、上端径8.8cmを測る。

同図3・4は鍔の破片で全形は知り得ない。素地は茶褐色で、気泡・亀裂・石灰質粒が観察できる。特に、3には赤色粒とそのスジ状の混入物が顕著に見られる。口径は3が26.8cm、4が28.5cmをそれぞれ測る。

(b) 甕（第10図1）

口縁部を折り曲げた、肩部の張る器形である。内外面に淡黒褐色の釉薬を施したものである。素地は茶褐色を呈し、乳白色・赤色のスジと石英らしきものを混入する。同一個体の肩部片をみると縄目状の凸帯1条巡らす。口径35.1cmを測る。

(c) 壺（第11図1）

玉縁状の口唇部をもち、縁部を外反させるものである。外面にアズキ釉を薄く施す。口唇部内面に乳白色の窯積め痕が観察できる。素地は茶褐色で、石英・石灰質の粒が散見できる。口径17.2cmを測る。

(d) 赤瓦（第12図1・2）

平瓦の破片が2点得られた。外面は丁寧に成形されるが、内面には布目痕が残る。素地は橙色を呈し、気泡・石灰質粒・赤色粒が観察できる。同図1の端部には漆喰の付着が見られる。

(e) 石製品（第12図3）

琉球石灰岩の4面を平坦に加工を施したものである。両端部の破損が著しく全体の形状は不明。正面中央部には、浅く凹部の成形痕が見られる。本標品については、類例資料の追加を待ち検討したい。

B

(a) 鉢（第13図１）

無釉口縁部の小破片である。破損が著しく全体の形状は不明。素地は茶褐色を呈し、乳白色・赤色のスジ状ものと石灰質粒・赤色粒を含む。

(b) 瓶（第13図２）

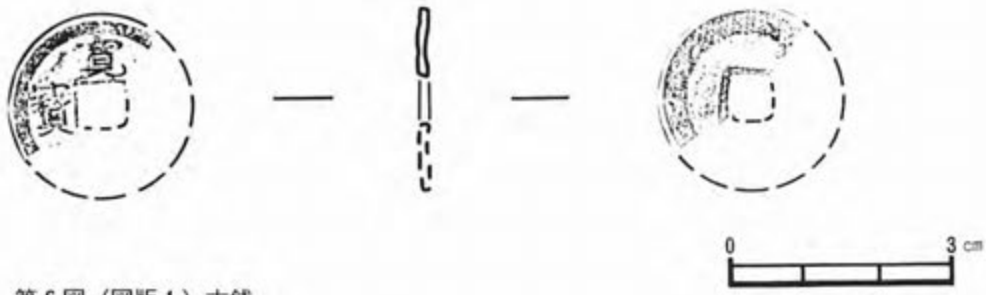
沖縄で「瓶子」と呼ばれている脚部の破片である。外面に灰釉を底面近くまで施す。内面は無釉。素地は灰色を呈し、顕致である。底面の径は8.8cmを測る。

(c) 碗（第13図３）

白磁の小破片である。全形は知り得ないが、口唇部を僅か折り曲げ、胴部で膨らむものと思われる。素地は白色を呈し、黒色の粒子が観察できる。

(d) 古銭（第６図）

寛永通寶の半欠品である。寛○○寶の文字が判読できる。本標品は古銭特有の青銅色でなく、全体に鉄サビ状の茶色を呈する。

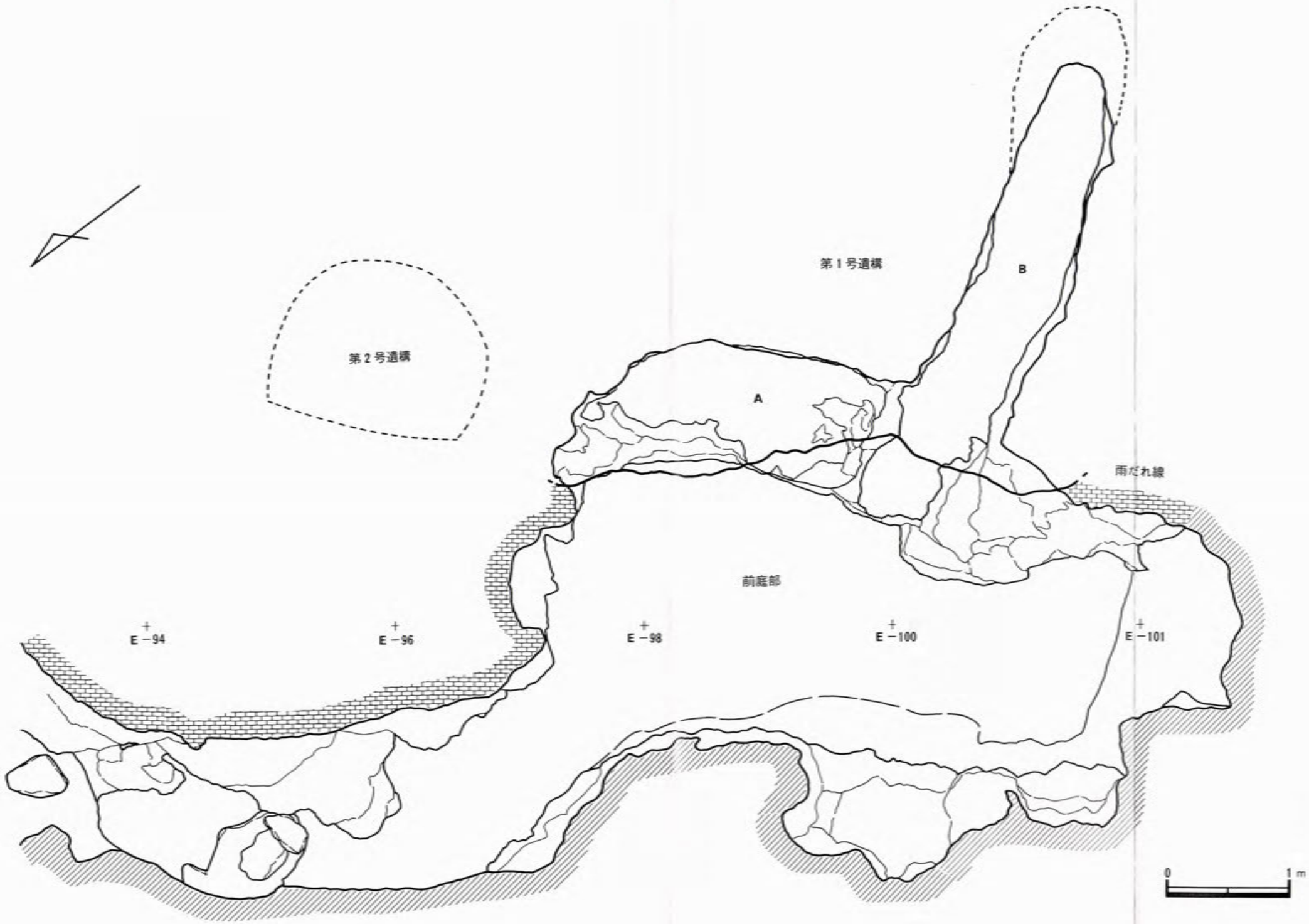


第６図（図版１）古銭

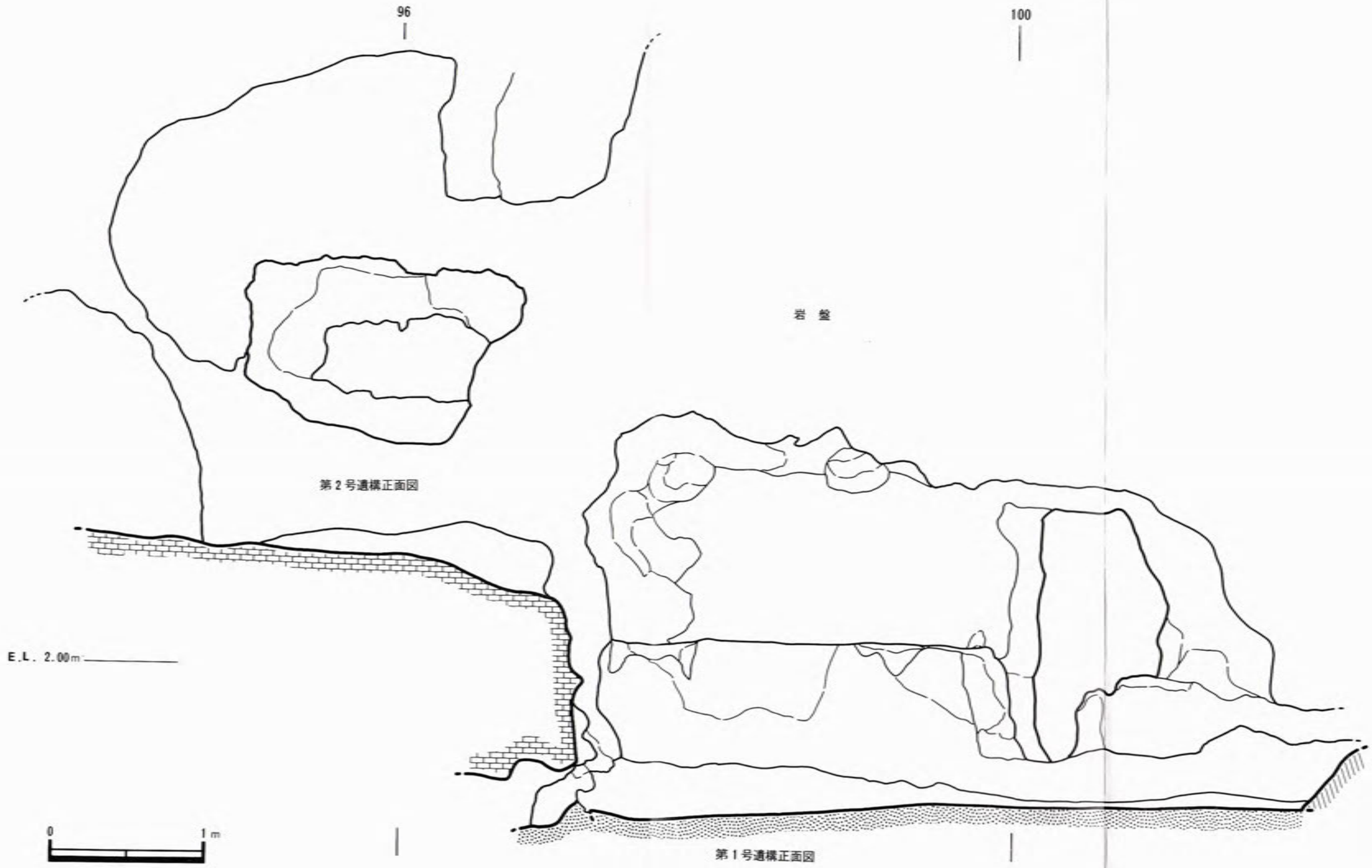
図版１（第６図）古銭

第1表　遺構別出土状況

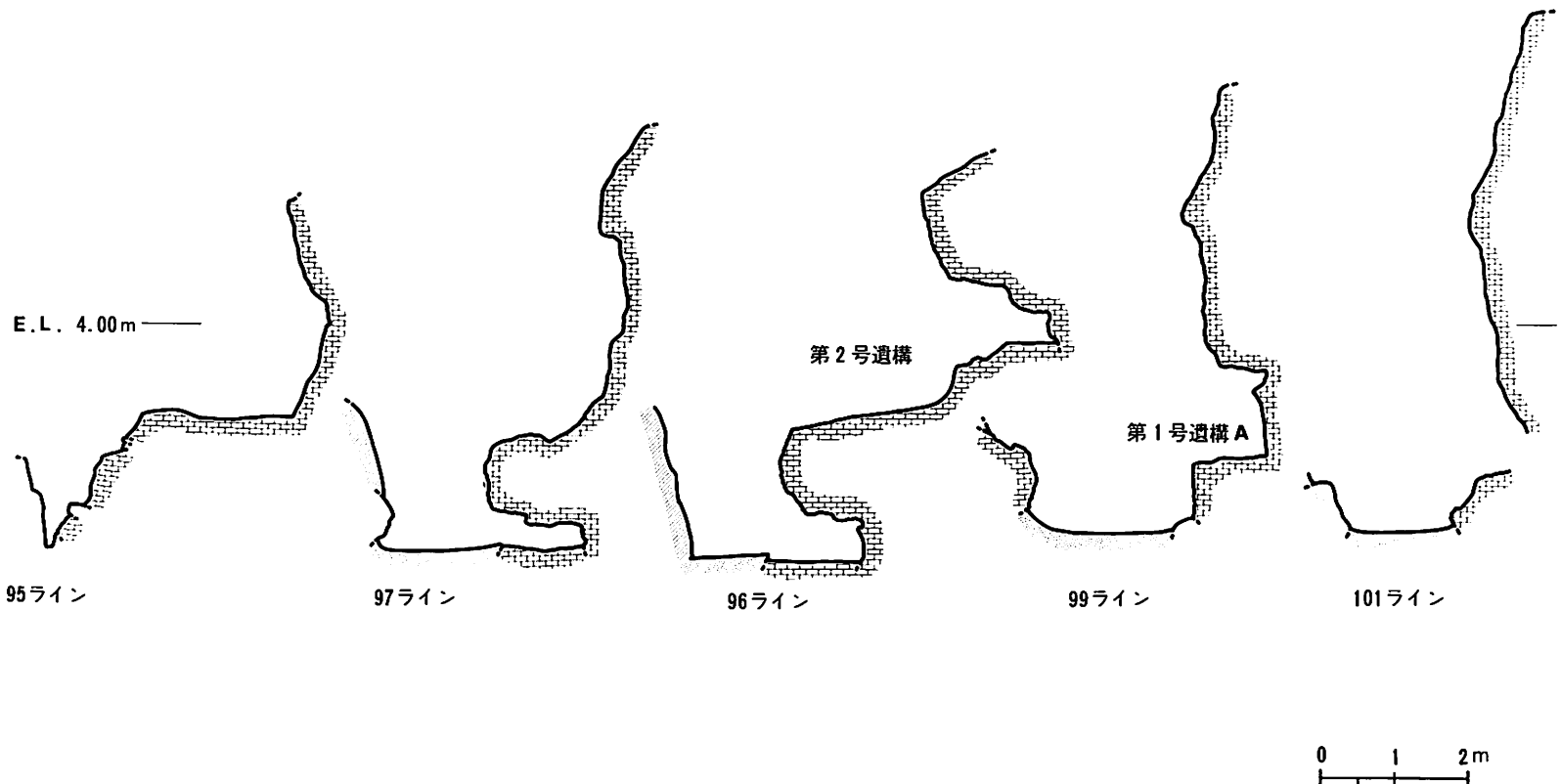
種類 ＼ 遺構			第1遺構 A	第1遺構 B	第1遺構 前庭部	第2遺構 内室	第2遺構 前庭部	第3遺構 墓室	第3遺構 前庭部	合計
納骨器	石棺							1		1
	無釉	甕形	1							1
		胴部	1							1
		底部								0
		蓋	4					2		6
	施釉	甕形	1							1
		胴部	1							1
		底部								0
		蓋								0
甕	施釉	口縁部	1							1
		胴部	6	1				2		9
		底部							1	1
	無釉	口縁部	1							1
		胴部	2							2
		底部								0
壺	施釉	口縁部	1							1
		胴部								0
		底部								0
	無釉	口縁部								0
		胴部								0
		底部								0
鉢	施釉	口縁部		1						1
		胴部								0
		底部								0
	無釉	口縁部						1		1
		胴部								0
		底部								0
碗	施釉	口縁部							1	1
		胴部					1			1
		底部								0
	磁器	口縁部		2				2	1	5
		胴部								0
		底部								0
瓶	施釉	口縁部								0
		胴部								0
		底部		1						1
仏飯器	磁器	口縁部						1		1
		胴部								0
		底部								0
水注	無釉	口縁部						1		1
		胴部								0
		底部								0
瓦		縁部	2							2
		破片	4							4
土器		口縁部						3		3
		胴部	1					3		4
		底部								0
不明	施釉	口縁部								0
		胴部	4	2				1	6	13
		底部						1		1
		不明						1		1
	無釉	口縁部	1	1			1			3
		胴部	5	5				1	1	12
		底部	1					1		2
		不明								0
石碑									1	1
古銭				1						1
石製品			1							1
貝（化石）				2						2
薬瓶（ガラス）			1							1
合計			39	16	0	0	2	21	11	89



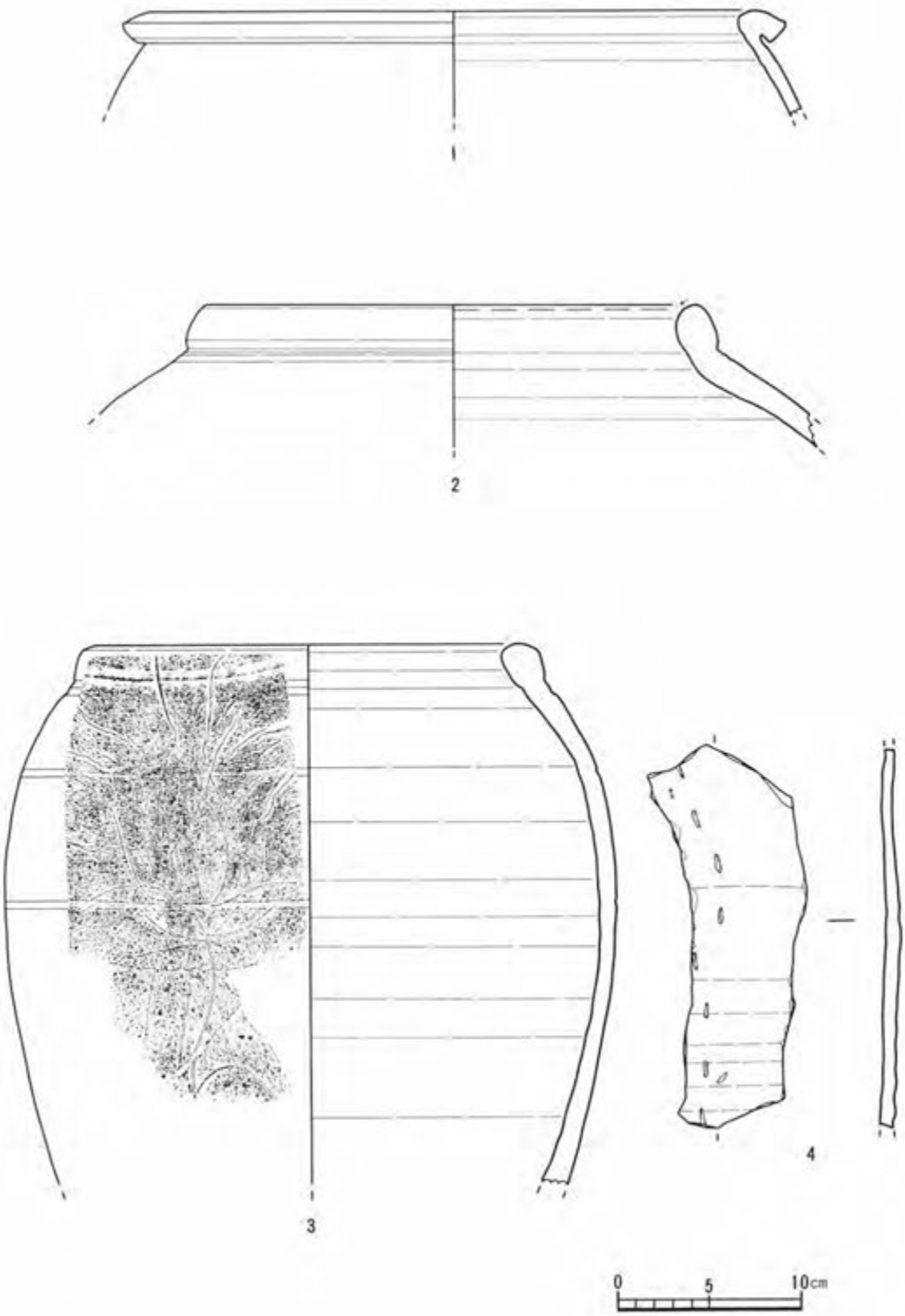
第7図　第1号遺構平面図（破線部は第2号遺構）



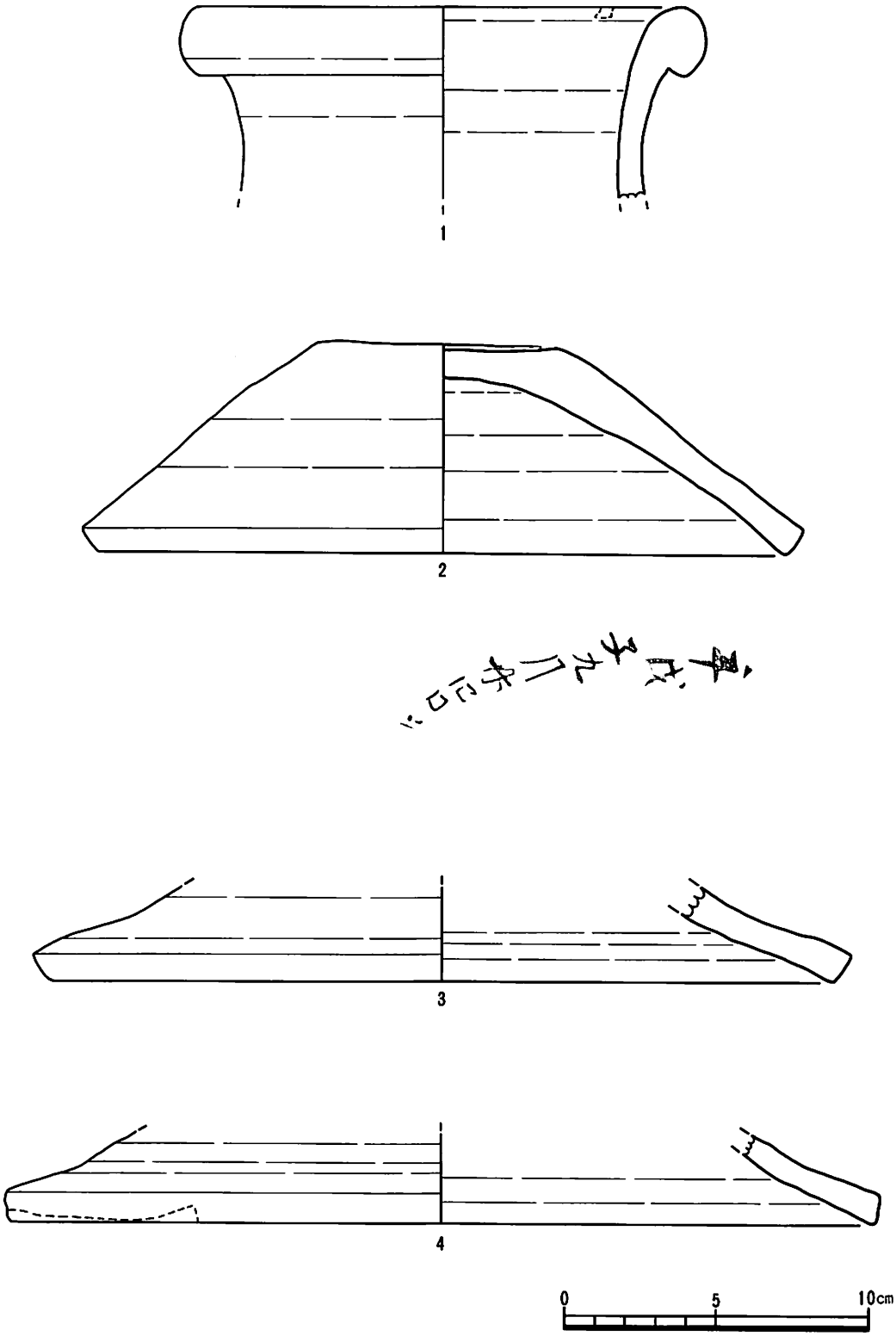
第8図　第1・2号遺構正面図



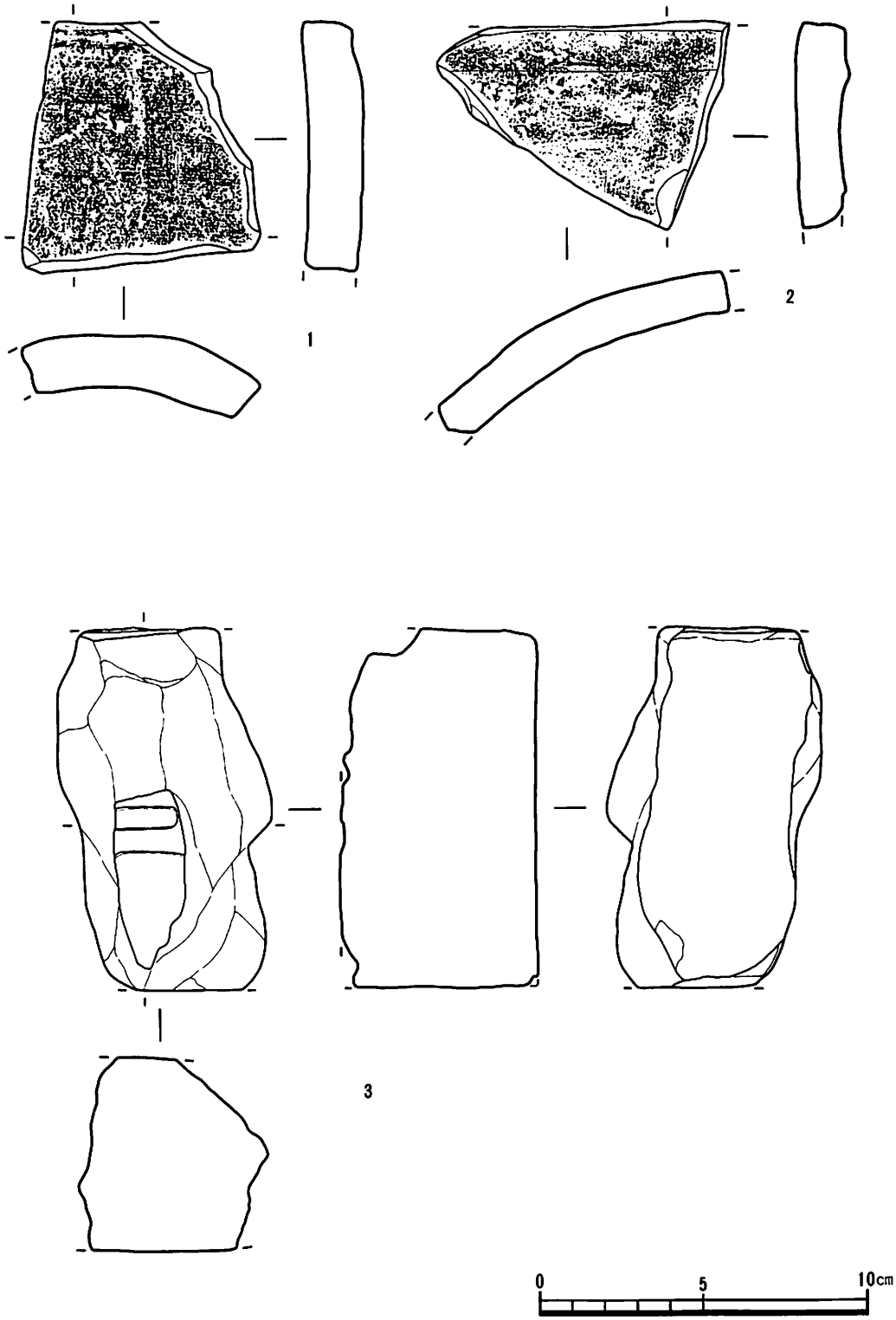
第9図　第1・2号遺構断面図



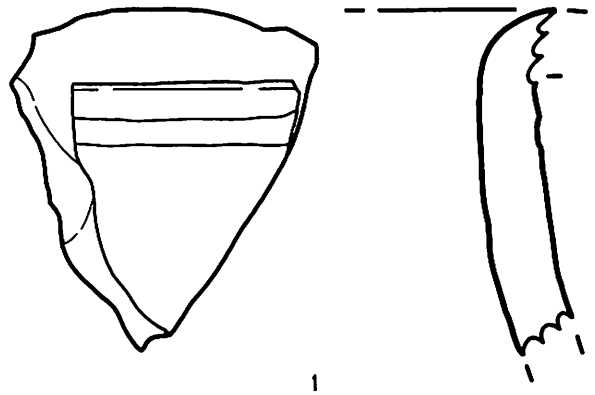
第10図　（図版８）第１号遺構Ａ：甕（１）、納骨器（２・３）、褐釉陶器（４）



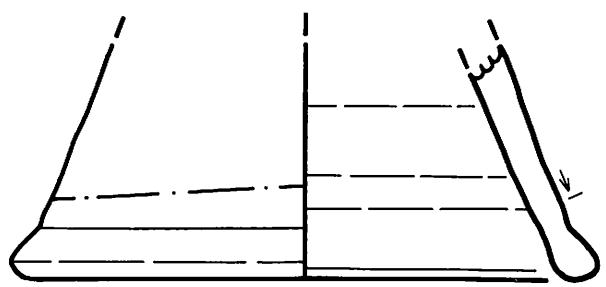
第11図（図版９）　第１号遺構Ａ：壺（１）、納骨器の蓋（２～４）



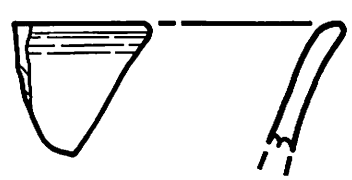
第12図（図版10）　第１号遺構Ａ：赤瓦（１・２）、石製品（３）



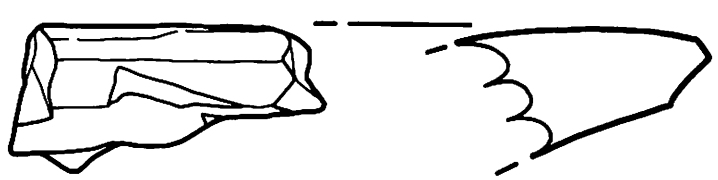
1



2



3



4

第13図（図版11）　第１号遺構Ｂ：鉢（１）、瓶（２）、碗（３）、第２号遺構：鉢（４）

第2号遺構

(1) 概要

第1号遺構と第3号遺構のほぼ中間にあり、主軸を北西に向ける。標高3.50mに位置する。琉球石灰岩の半洞穴を利用したもので、全体に小振りである。内室は石灰の小礫で平坦面を整形する。壇は見られない。

前庭部と思われる広場は、内室より一段（約90cm）下がって見られるが、墓庭なのか判然としなかった。

(2) 出土遺物

本遺構よりは資料は殆ど得られなかった。僅かに、鉢・碗（本土産の印判染付）の破片が出土した。小破片のため、鉢のみ図示した。

(a) 鉢（第13図4）

口唇部の破片であるが、逆L字状の鉢になるものである。焼成はやや不良で、表裏面灰色を呈する。素地は明茶褐色を呈し、赤色粒・黒色粒が観察できる。

第3号遺構

(1) 概要

調査区の北側に位置する掘込み墓で、主軸をほぼ北側に向ける。墓口は幾らか破壊されているが、概ね高さ120cm×幅100cmの長方形を呈する。墓室は全体に略方形状で、天井はやや平坦であるが、剥落が著しい。全体に幅約5cmのノミ痕が顕著に残る。その墓室は墓口より一段下がり、周辺に石壇を設ける。さらに、右側壁から奥壁にかけて石壇を構築する。この石壇には中央に仕切りが見られる。

前庭部は、墓口の手前が破壊されていたが、周辺には僅かに平坦面が見られた。その平坦面は、西側へ緩やかな斜面地を形成する。墓口の袖には、琉球石灰岩の礫の集石遺構が2基確認された。左側の1号集石は略方形を呈し、周辺を大振りの石で囲み内部に小振りの礫を配する。遺構上面から、炭痕が検出された。右側の2号集石はやや円形を呈し、大振りの礫を配する。碑文は墓口の右側へ立て掛けられていたとのことである。

(2) 出土遺物

本遺構の墓室及び前庭部より、納骨器・鉢・水注・碗・土器・石碑等が多種多様に得られた。

墓室

(a) 納骨器（第17・18図）

家形と甕形の2種類が見られた。

第17図は、沖縄で「イシジーシ」と通称されているもので、入母屋型の屋根を持つ石灰岩製の石棺である。一般的な石棺とは異なり、断面をL字状に整形したものである。前面部（方形）と背面部（長方形）にそれぞれ遺骨を納める箇所を設ける。また、背面部の正面下部には前面部とつなぐ粗孔がレンズ状に穿たれている。

正面・側面には、幅約1.4cmのノミ痕が顕著に見られる。発見時には遺骨が両方に納められていたとのこと。本標品は、県内で初例をなすものと思われる。

第18図は納骨器に2次転用された施釉陶器の甕である。口縁部と底部を欠失した資料で、内外面に濃い飴釉を施す。肩部から胴上部にかけて同心円状のたたき痕が見られる。また、肩部には、乳白色の窯詰め痕が弧状に観察できる。素地は灰白色を呈し、茶色粒・白色粒が散見できる。移入品と思われる。

第19図3は甕形（いわゆるボージャージーシ）の無釉の蓋である。外面に櫛掻きによる4状の沈線が描かれていたが、全体の構図は判然としない。素地は茶褐色を呈し、気泡・石灰質粒・赤色粒が見られる。

(b) 土器（第19図1）

口縁部を外反させ肩部の張る壺形土器の破片である。色調は内外面橙色で、芯部は黒色のサンドイッチ状を呈している。胎土には石灰質の小礫やチャート片を多量に混入する。本標品は、県内の古墓より出土する土器壺と類似するものである。

(c) 水注（第19図4）

口縁部を立ち上げ、肩部を持ちながら平底に至るどっしりした無釉の標品である。口縁部の内側に蓋受け部を作る。底面はやや上げ底ぎみで、剥落痕がみられ加熱を受けたものと思われる。肩部の注口には、口唇部にV字状の抉りが見られる。また、把手痕も一対見受けられる。素地は茶褐色を呈し、石灰質粒等が見られる。

(d) 鉢（第20図）

無釉の大振りの鉢である。口縁部を逆L字状に折り曲げる、幅広い口唇部には沈線を2条描く。その端部には、縄目状の細目の凸帯を巡らす。また、胴部には、牡丹唐草文を張り付

ける。

素地は淡茶褐色で、石灰質粒・気泡等が見られる。口径49.3cm・器高25.2cm・底径19.1cmを測る。

(e) 仏飯器（第21図１）

全体に乳白色を呈し、僅かに貫入が見られる。文様が呉須を用いて外面に圏線を３条巡らし、その上から抽象化された草花文（？）を描く。畳付けは露胎で、僅かに砂目痕が残る。本標品は肥前系で、17Ｃ後半に位置づけられる。口径8.4cm・器高6.8cm・脚台径4.2cmを測る。

(f) 小碗（第21図２）

全体に白色を呈する。文様は呉須により、２条の圏線を口縁部・高台脇・見込みにそれぞれ巡らす。外面は枝付きの花（？）を４ヶ配する。見込み内には、捻り文を描く。また、高台内には、「大明成化年製」の銘が見られる。畳付けは露胎で、僅かに砂目痕が残る。本標品も肥前系で、17Ｃ後半のものである。口径12.1cm・器高5.8cm・高台径5.1cmを測る。

(g) 碗（第21図３）

全体にモスグリーンを呈する。文様は呉須によって、圏線を口縁内外・見込みに１条巡らし、高台脇にはラフに２条施す。外面と見込み内には草花文を描く。高台内には「天下太平」銘が記されている。畳付けは露胎で、僅かに砂目痕が残る。本標品は中国製で、16Ｃ頃のものである。口径12.1cm・器高5.8cm・高台径5.1cmを測る。

(h) 器種不明（第19図２）

円形状の半欠品である。全体に中心へ窪みながら、「く」の字状に成形されたものである。表裏面に光沢を有するほど、焼成はかなり良好である。素地は茶褐色を呈し、気裂・石灰質砂粒が散見できる。本標品は水注のおとし蓋と想定されるが、類例資料をまち検討したい。

前庭部

(a) 甕（第22図３）

口縁部を方形状に作り、胴部の張る内湾形の甕である。胴部には沈線によって牡丹唐草文を描く。釉薬は施さない。素地は茶褐色を呈し、乳白色のスジ状のものを含む。その他に、赤色粒・石灰質粒と気泡・亀裂が散見できる。口径25.0cmを測る。

(b) 底部（第22図４）

施釉陶器の甕形の底部片である。外面に底面近くまで、光沢のある黄土色の釉を施す。素地は内外面灰色で、芯部茶褐色のサンドウイッチ状を呈する。石灰質の粒と乳白色のスジ状の土を混入する。移入品と思われる。

(c) 碗（第22図１・２）

同図１は陶器碗の破片である。光沢のない暗茶褐色釉を内外面に施す。素地は淡黄褐色を呈する。沖縄産と思われる。

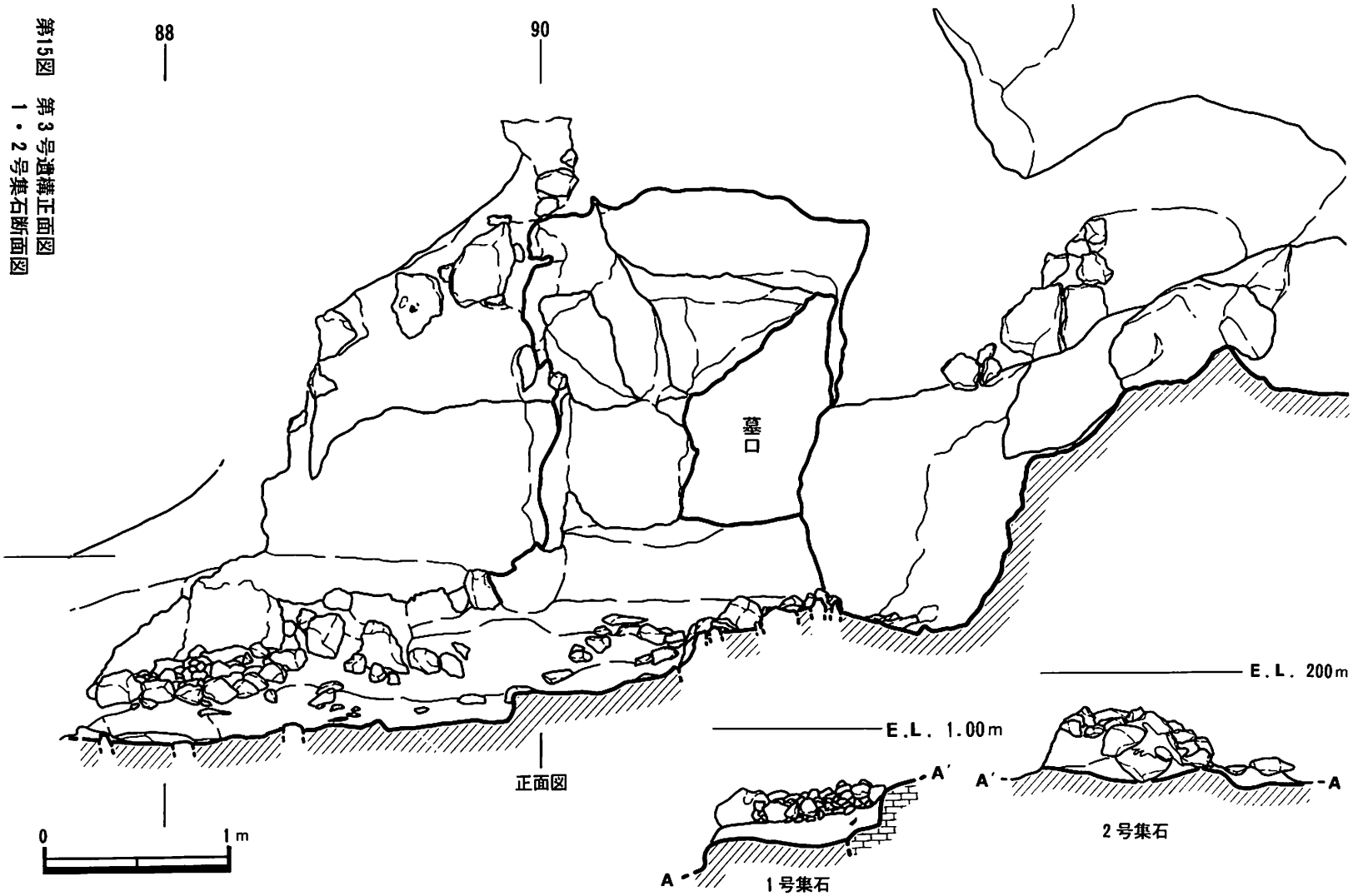
同図２は磁器碗の破片である。外面に吾須より圏線と斜位の文様を描く。素地は白色で顕致である。本土産と思われる。

(d) 石碑（第23図）

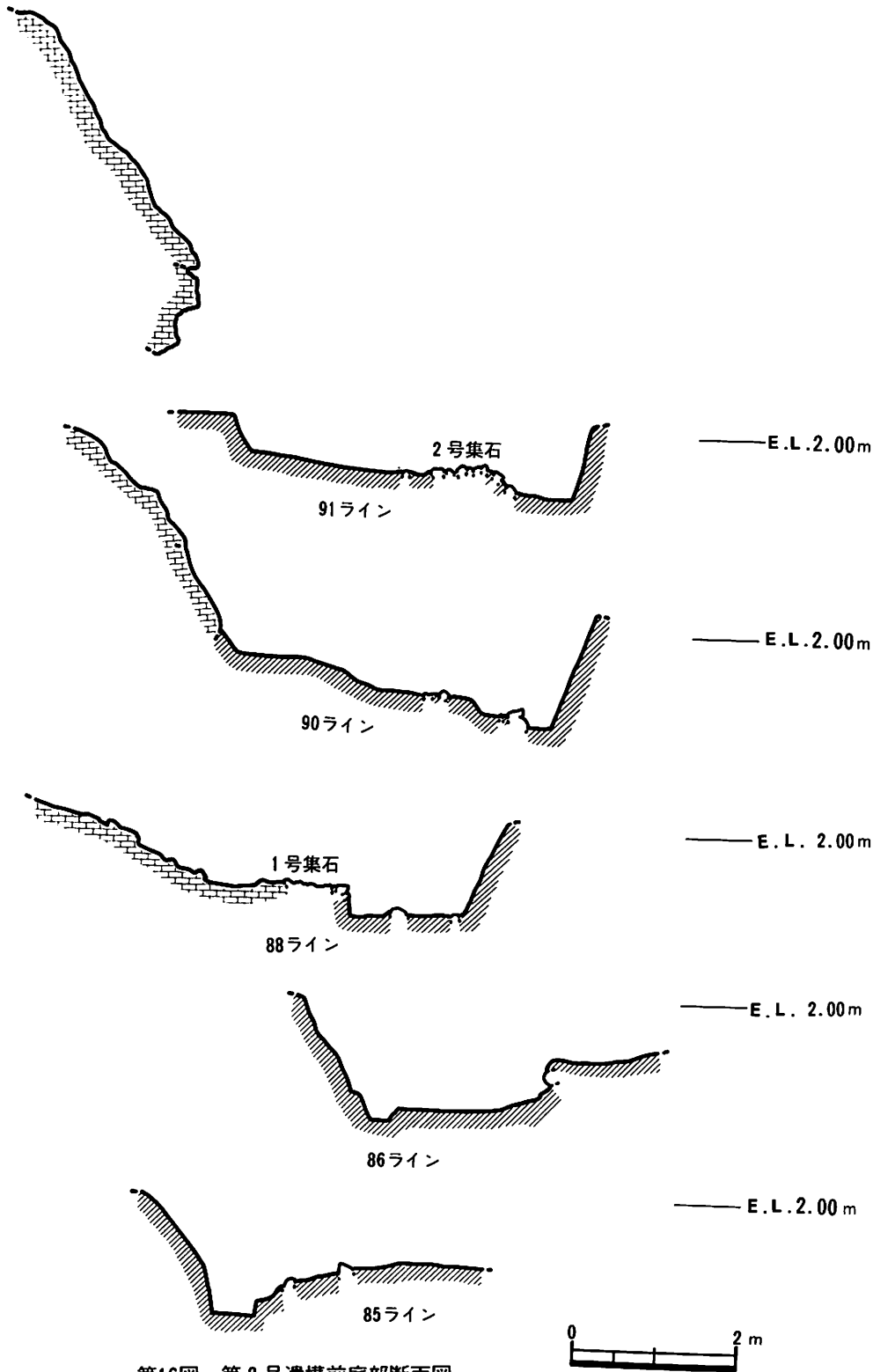
頂部を半円形にした微粒砂岩製の碑文である。上・下端には断差を設け、右側面には幅約0.5cmのノミ痕が顕著にのこる。下端には径4.2cm粗孔を途中まで穿がつ。表面の周辺には、漆喰の付着が顕著に見られる。表面中央には漢字で「卍　帰空　良弼大禅定門之石塔」、右側はひらかなで「なこのおやかたの……」、さらに左側には漢字で「萬暦　十五　丁　十二月二十七日　建立」３行の文字が掘り込まれてる。その周囲を２本の直線で囲み、さらに牡丹唐草文（？）と沈線を描く。本標品の出土状況は工事関係者からの聞き取りによると、墓口の右側へ立て掛けていたとのことである。

サイズは、全長72cm、幅26cm、厚さ11.5cmを測る。

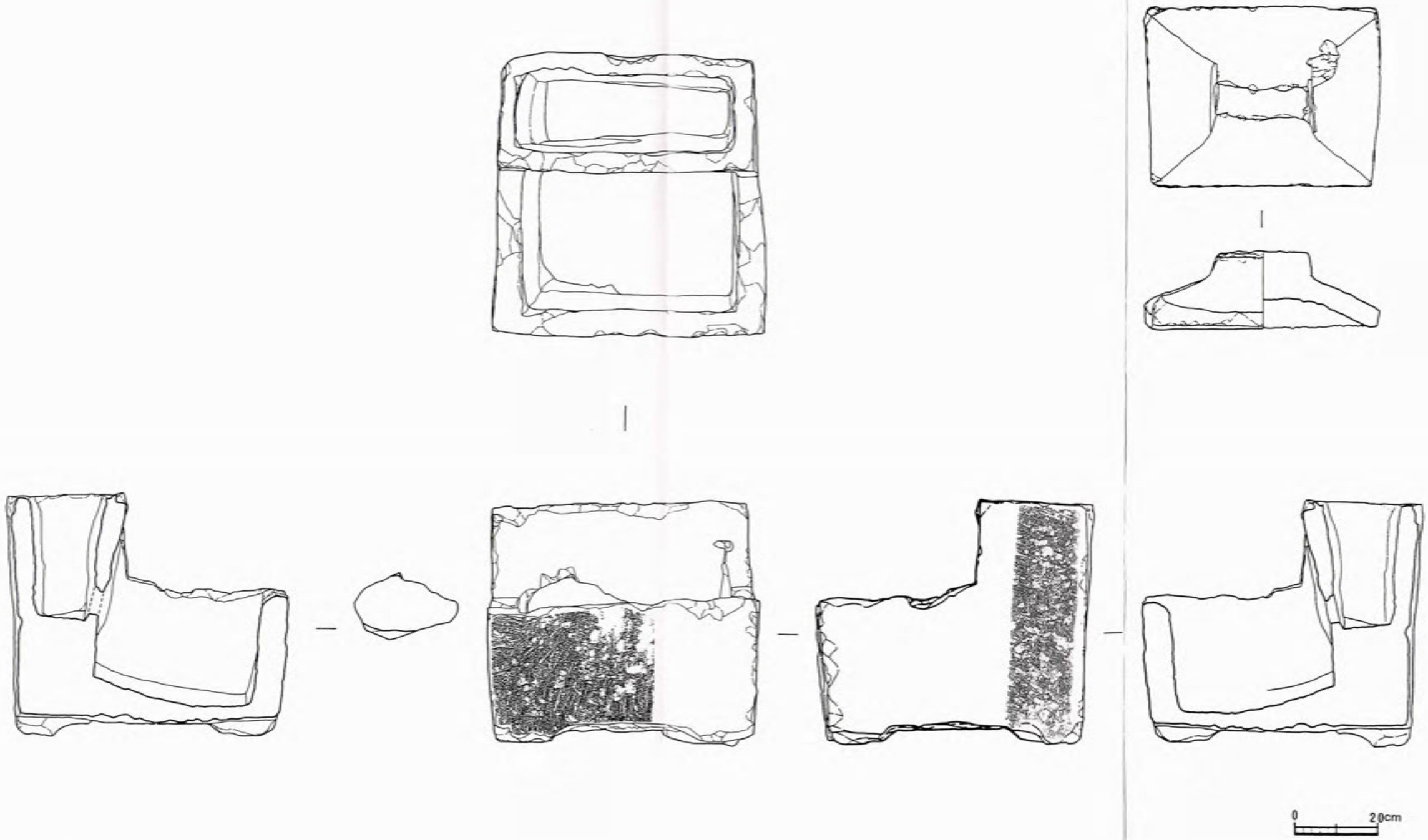
第14図　第3号遺構平面図



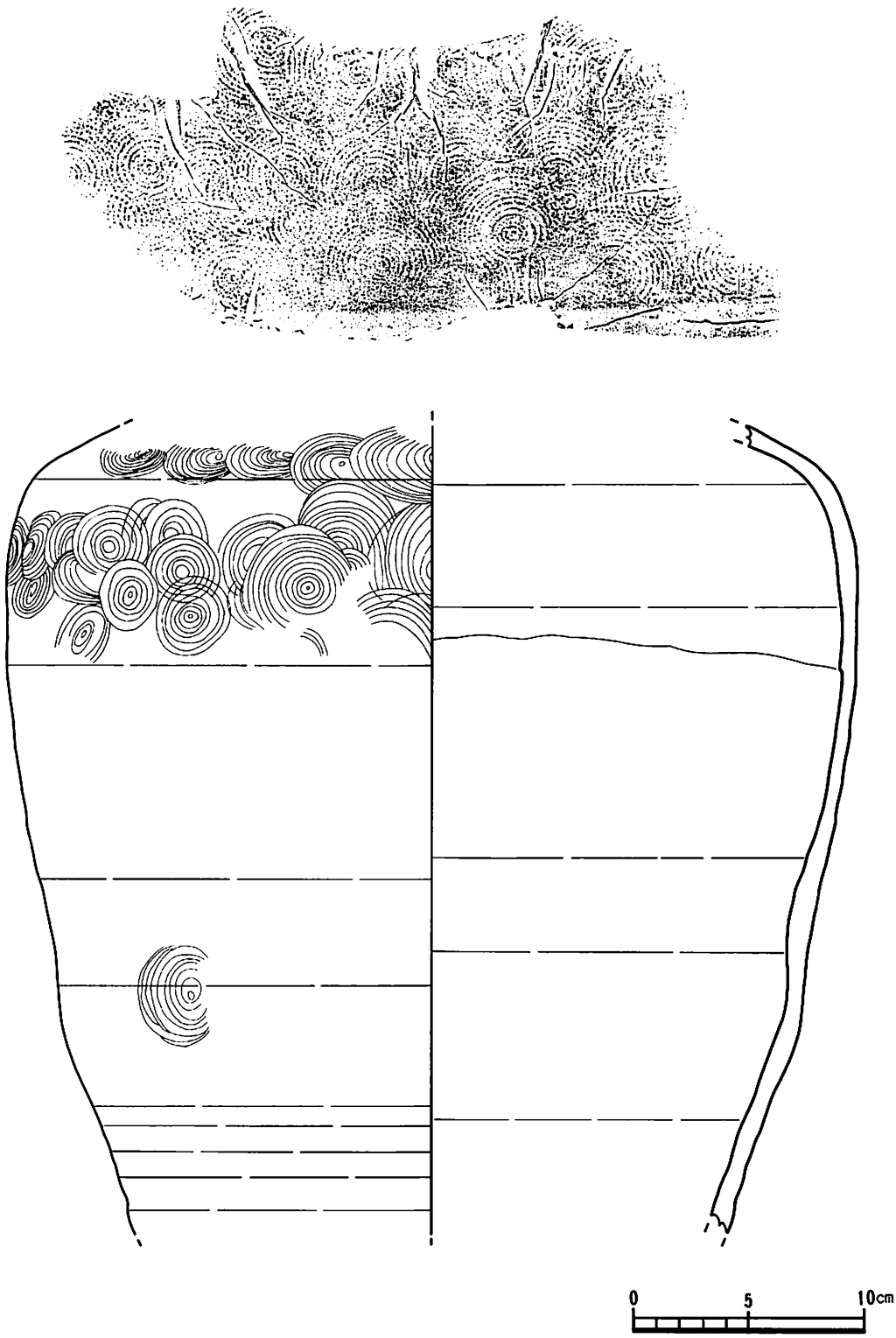
第15図　第3号遺構正面図
1・2号集石断面図



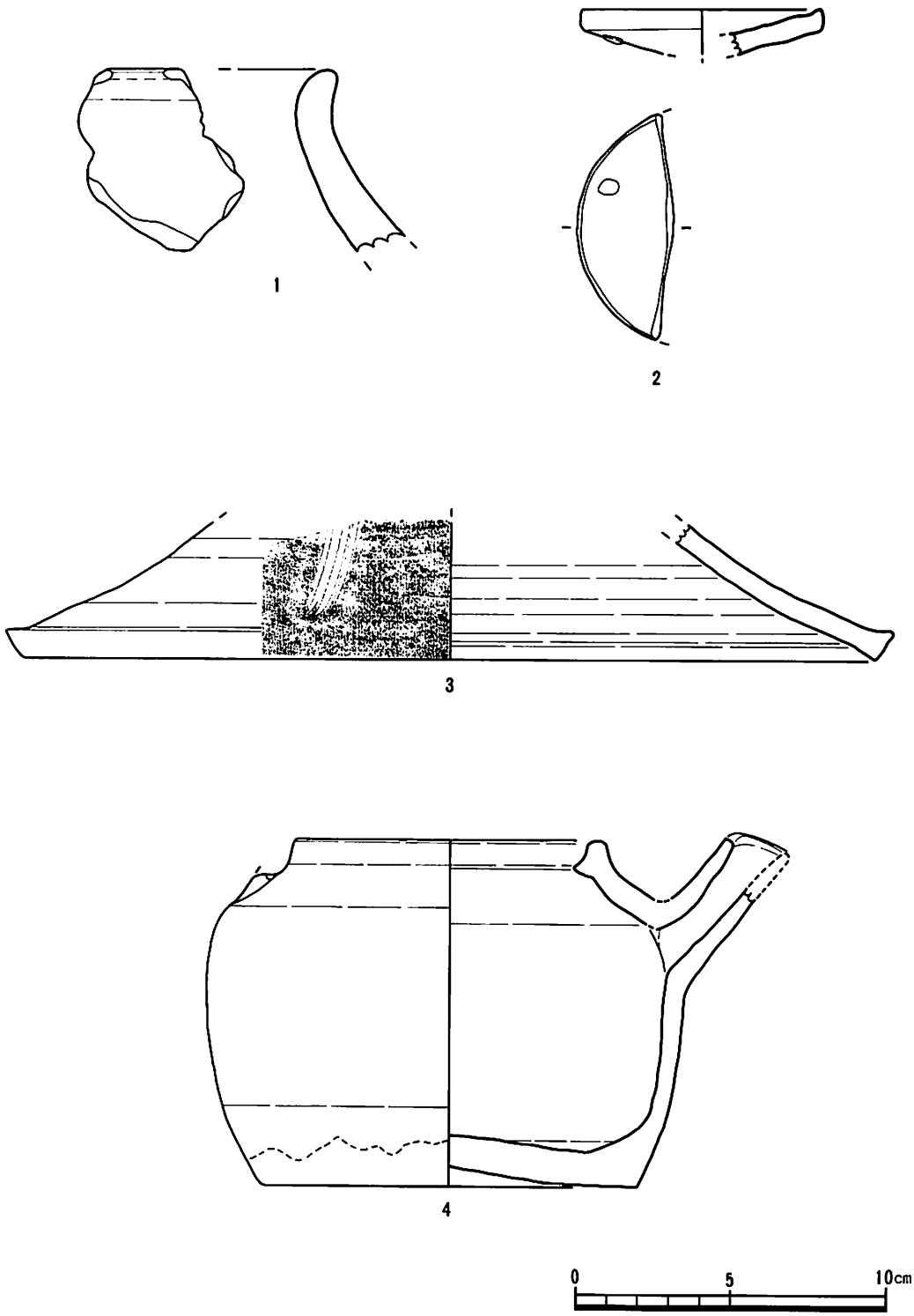
第16図　第3号遺構前庭部断面図



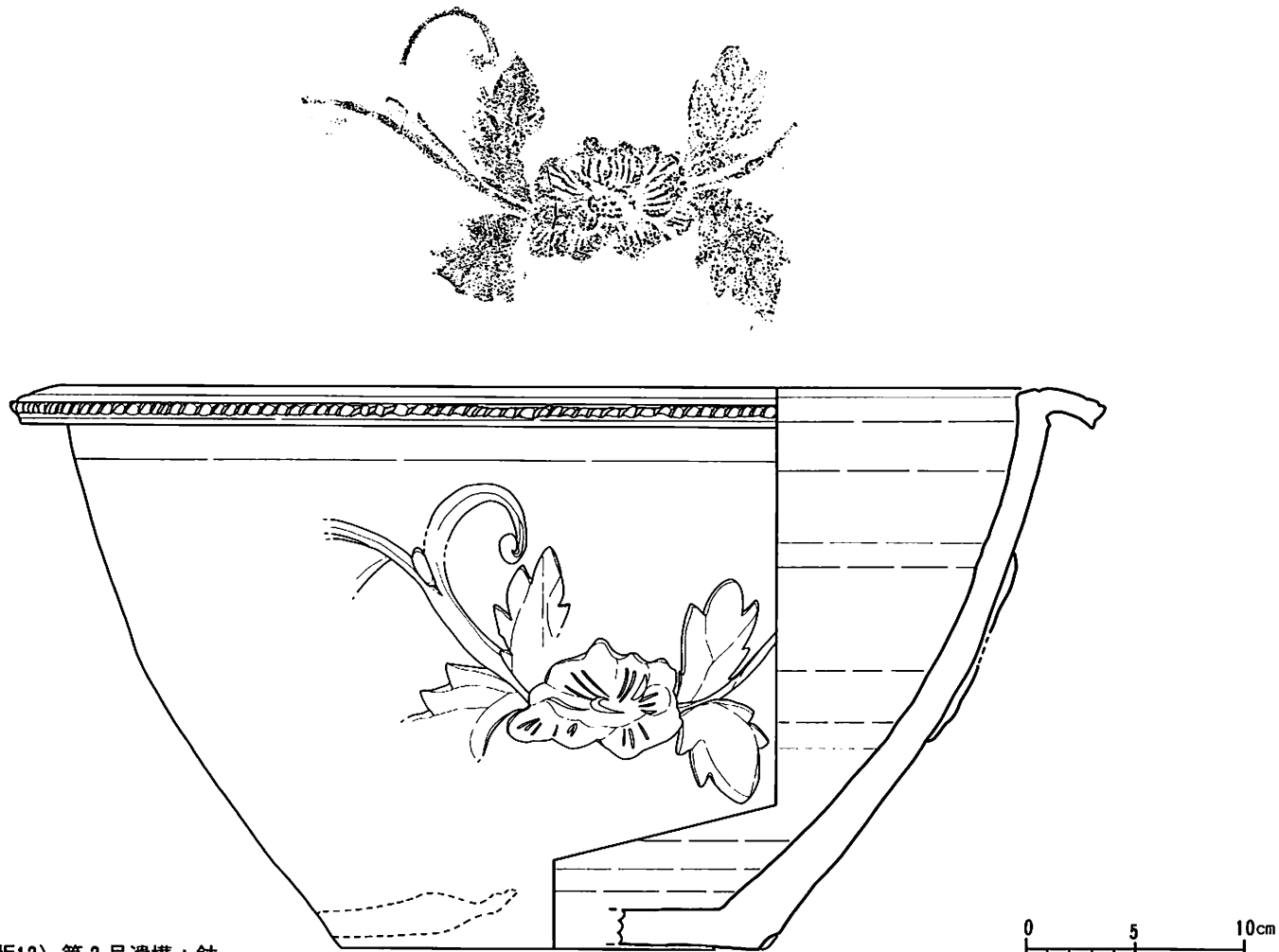
第17図（図版12）第３号遺構：納骨器（石棺）



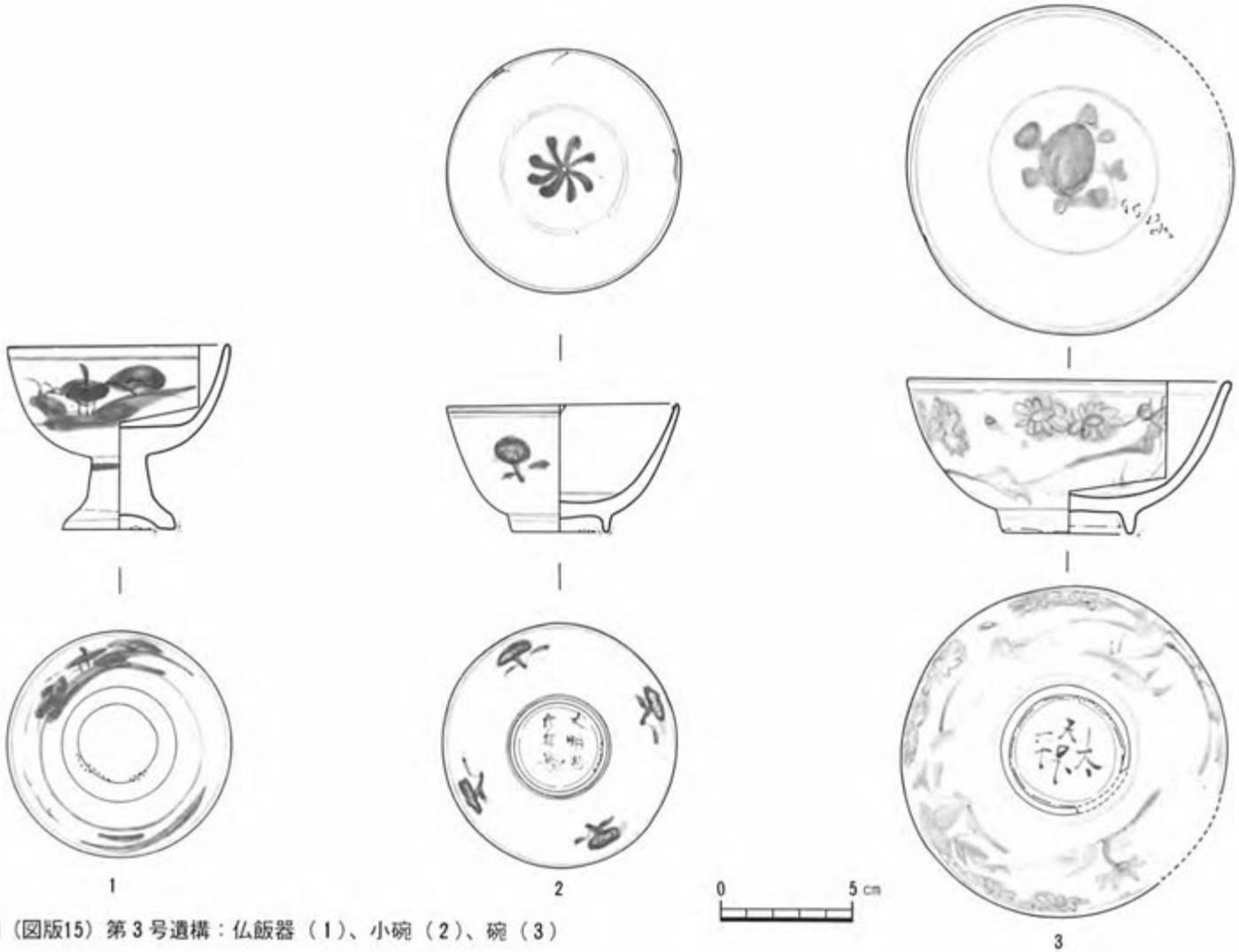
第18図（図版13）第３号遺構：甕



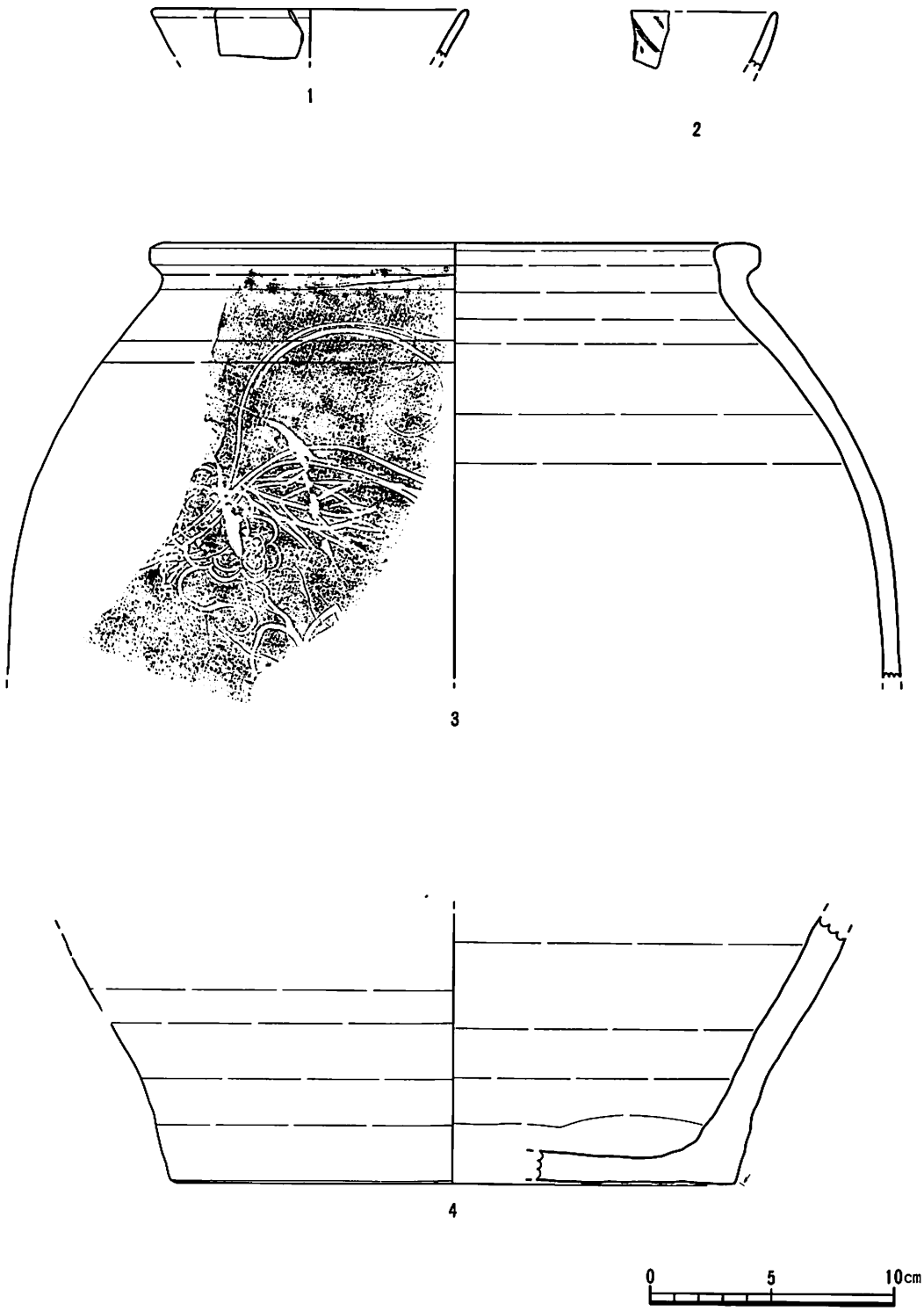
第19図（図版14）第３号遺構：土器（１）、器種不明（２）、蓋（３）、水注（４）



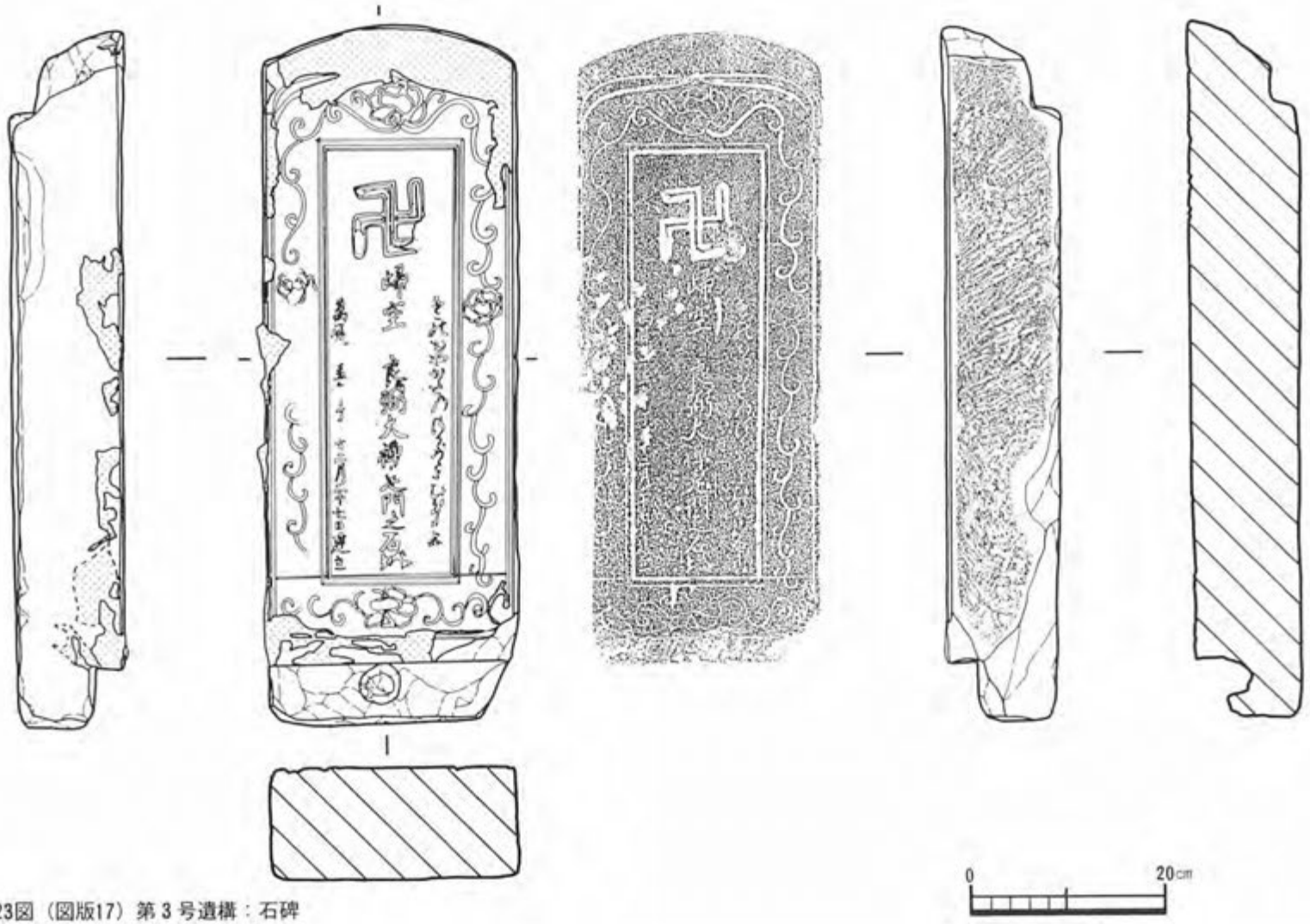
第20図（図版13）第３号遺構：鉢



第21図（図版15）第３号遺構：仏飯器（１）、小碗（２）、碗（３）



第22図（図版16）第３号遺構：碗（１・２）、甕（３）、底部（４）



第23図（図版17）第３号遺構：石碑

第Ⅴ章　名護良豊について

小禄殿内と称された首里の名家馬姓小禄家は、奄美大島の首長であった湯湾大親の孫、大浦添親方良憲に始まる。良憲は三司官を務めたが、その後21人もの三司官を輩出した名家中の名家である。

その３世が名護良豊である。彼は1551年、父浦添親方良員、母名護大按司志良礼の次男として生まれた。童名を太良金、唐名は馬良弼、号を汝舟と称した。彼は毛姓池城親方安棟の長女真牛金を娶り、１男３女に恵まれた。その内、３女の思真牛金は尚豊王の妃となっている。しかし、長男の良寧は1611年、29歳の若さでこの世を去り、跡目は次女真加戸が嫁いだ今帰仁親方宗能の嫡子良益に継がせることとなった。

さて、彼の履歴を見たい。まず、1579年６月に尚永王冊封の謝恩王舅となり、同時に三司官座敷に就任。12月11日に、長史鄭迺謝名親雲上と共に中国に渡っている。1592年、兄の良真が亡くなったことから、次男ながら父の跡を継ぎ、三司官となり、同時に名護間切の総地頭となった。1597年に建立された「浦添城の前の碑」の表に、「世あすたへ」の一人として「なこの大やくもいまたる」、裏に三司官の一人に「名護太郎金」と名を連ねている。この碑は、太平橋（平良橋）を石橋に架け替え、「きほくひり」（儀保クビリ＝首里儀保町にある小坂）に至る道を石畳にするなど、首里から浦添に至る当時の幹線道路を整備した時の竣工記念碑である。

1609年、薩摩が琉球に侵攻。３月16日に今帰仁へ薩摩軍が押し寄せていることを伝え聞き、西来院菊隠、江州栄真、喜安、津見、池親雲上等と共に和睦の話合いのため、26日に首里を発った。しかし、恩納間切倉波（現恩納村字山田）に来たところで、今帰仁から戻った河内、東風平から、道中に薩摩軍が溢れているとの報告を聞き、小舟で恩納を経由し翌日今帰仁間切親泊の沖に至った。薩摩の船から銃口を向けられ、龍の髭を撫で、虎の尾を踏むような思いで薩摩の船に乗り移り、なんとか無事に運天に着くことができた。しかし、薩摩側は和睦の話合いは那覇で行うとしてつっぱね、菊隠等は首里へと引き返した。一方、良豊は人質として薩摩の軍船に止められ、那覇へと向かった。

４月１日には、薩摩は那覇へ入る一方、首里城へ迫った。良豊等は和睦をなすべく努めた。そして、４日、ついに尚寧王は城を出て、良豊の家に身を移した。その後王は浦添美御殿に移り、５月14日、首里を後にして囚われの身として大和への道行きに旅立った。良豊は特に王城鎮守の王命を受け、首里に止まり、留守を司どることになった。

翌年、薩摩は琉球と中国との進貢関係が杜絶するのではないかと憂慮し、上国していた毛鳳儀池城親方安頼に、王舅として中国へ渡るよう命じ帰国させた。早速、安頼は中国へ向かい、倭乱＝薩摩侵攻を伝え、国力の消耗を理由に２年一貢の緩和を嘆願した。この時、良豊は、看掌国事

法司として、王妃、王弟尚宏等と、礼部、福建布政使司あての咨文の差出人に名を連ねている。

1612年、進貢の継続を許されたこと、さらに船2隻を給されたことに対する謝恩と進貢のため、良豊は王舅として正義大夫鄭俊花城親雲上、副使柴氏宮城親雲上倫正等と中国へ渡った。しかし、この年には柏寿、陳華等も中国に赴き、貢朝の緩和を嘆願したが、10年一貢に制限されている。

良豊は翌年帰国。その年の9月15日には、島津家久から特に太刀、馬代500疋を下賜されている。1615年、家久に謁見のため薩摩へ赴き、鎧1本、濃茶茶碗2個、御茶入1個を拝領。後に赤地浮織冠と、知行高800斛を賜っている。

1617年11月15日、良豊は67歳にしてその波乱に満ちた生涯を閉じた。

参考文献

沖縄県姓氏家系大辞典編纂委員会編、「小禄」、『沖縄県姓氏家系大辞典』、1992年、角川書店、p．424

那覇市企画部市史編集室編、「馬姓家譜」、『那覇市史資料篇第1巻7家譜資料三』、1982年、那覇市企画部市史編集室、p．p．515～547

沖縄大百科事典刊行事務局編、「名護良豊」、『沖縄大百科事典下巻』、1983年、沖縄タイムス社、p．52

沖縄県教育庁文化課編、「浦添城の前の碑」、『金石文――歴史資料調査報告書Ⅴ』、1985年、沖縄県教育委員会、p．p．31～33

那覇市企画部市史編集室編、「喜安日記」、『那覇市史資料篇第1巻2』、1970年、那覇市企画部市史編集室、p．p．37～59

沖縄大百科事典刊行事務局編、「池城安頓」、『沖縄大百科事典上巻』、1983年、沖縄タイムス社、p．153

沖縄大百科事典刊行事務局編、「沖縄・奄美総合歴史年表」、『沖縄大百科事典別巻』、1983年、沖縄タイムス社、p．p．90～92

第Ⅵ章　ま　と　め

以上、発掘調査の成果について述べた。調査に至る経緯については、第Ⅰ章でも述べたように「名護良豊に関する石碑と古墓」の発見がきっかけであった。名護良豊の時代背景については、第Ⅴ章の古塚達朗氏によって詳細に紹介されていますので参照されたし。ここでは、第3号遺構を中心にその調査成果をいま一度整理して若干の要点と課題にふれまとめとしたい。

さて、第Ⅱ章でも述べたように、本古墓群は天久台地の北側に延びる琉球石灰岩の崖下の一角に形成されている。市内には、このような石灰岩地帯に占地した墓が数多く見られる。崖下の他にも、小高い丘や斜面地を利用した様々な古墓群が立地している。一方、非石灰岩地帯（主に小禄地域）においても古墓群が同様に展開している。それら墓域の選定については、そこに住む人々の他界観を如実に反映しているものと思われる。具体的には、集落・耕作地との関係・時期差等が考えられる。さらに、グスク時代～近世にかけての首里・那覇の町づくりとも関わってくるものと思われる。今後は、市内における詳細な古墓の分布調査を行うことによって、本古墓群の歴史的環境がより明確になるものと考える。

今回の調査で、遺構は3基確認された。第Ⅳ章で述べたとおり、第1・2号遺構は保存状態が悪く、本来墓としての機能を有していたのか判然としなかった。今後類例資料の追加をまち検討したい。その中で、第3号遺構は比較的状態がよく、主軸を北側に向けた掘り込み墓である。墓口・前庭部については判然としなかったが、墓室は天井部を除いて保存状態が良かった。墓室は墓口より一段下がり内床を作り、その周囲に石壇を構築する。さらに、右奥壁に石壇を掘り込む手の込んだ作りの墓である（註1）。

本遺構は馬姓一門の「名護良豊」を中心に祀られた墓である。名護良豊は17世紀前半頃まで活躍しており、そのことより、本遺構が当該期前後の墓に位置づけられるものと考えられる。そのことは、後述する出土遺物からも窺える。

出土遺物は自然遺物と人工遺物に大別でき、前者は第1表に示したとり希少であった。後者には注目される資料がいくつか得られた。ここでも、第3号遺構より出土した資料を中心に述べたい。人工遺物としては、土器・沖縄産陶器・輸入陶磁器・石棺・石碑等が得られた。沖縄産陶器の中で、第10図1，第11図1・3，第13図1，第22図3の標品群が注意を引いた。この一群の無釉陶器（アラヤキ）は全体に暗褐色を呈し、素地に乳白色のスジ状のものと赤色のスジ状・粒状（焼土？）のものを混入する特徴が見られた。このような特徴は喜名焼の無釉陶器中に散見でき、喜名焼に帰属する可能性が高いようである（註2）。

輸入陶磁器は、16～17世紀に位置づけられる肥前系の仏飯器・小碗と中国産の碗が3点ほぼ完形に近い状態で得られた。おそらく、副葬品として納められたものと思われる。　さらに、注目

される資料として石棺・石碑が挙げられる。石棺は断面「L」字状に成形され、納骨施設を2箇所もつ特異の形態をした石棺である。県内には合葬施設を有する墓が知られているが、本標品がこのような機能を凝縮して持ち合わせていたのか興味深い資料である。今後、資料の増加を待ちたい（註3）。

次に、石碑であるが碑文より名護良豊の死後約1ヶ月の短期間に建立されたことが、家譜（1617年11月15日死去）と碑文（同年12月27日建立）より窺える。また、碑文に見られる仏教の影響や円首に見られる「卍」の文様などは、前記した仏飯器と合わせて沖縄における当核期の仏教文化の一端を押さえる上で貴重な資料を提供したものと考える。

以上、若干の要点と課題について述べた。現状では、本古墓群の特徴のみを示す結果となった。今後は、近年増加している近世古墓群の発掘調査の事例との比較研究、さらに、民俗学・歴史学・人類学・解剖学・宗教学などの学際的な検討を加えることによって、本古墓群を含めた当核期の葬墓制が徐々に明らかになるものと思われる。

〈註〉

註1：内床と石壇については、方言で前者を「シルヒラシ」、後者を「タナ」と通称されている。

註2：読谷村教育委員会の仲宗根求氏の御好意により喜名焼の発掘資料を実見できた。

註3：合葬施設については、方言で「イケ」などと通称されている。

〈参考文献〉

高宮広衛・名嘉真宜勝「沖縄の墓　主に亀甲墓について　」『墓』社会思想社1975年

上原　静・下地安広他「チヂフチャー古墓群調査報告書」『浦添市文化財調査報告書第8集』浦添市教育委員会　1985年

上江州均『沖縄の暮しと民具』慶友社　1982年

「那覇市歴史地図」『文化遺産悉皆調査報告書』那覇市教育委員会1986年3月

座間味政光・太田宏好他「古我地原内古墓」『沖縄県文化財調査報告書第85集』1987年12月

知名　定順・金城利枝他「クジチ墓・クジチ原遺跡発掘調査報告書」『宜野座村乃文化財(6)』沖縄県宜野座村教育委員会1988年3月20日発行

『シンポジウム南島の墓』沖縄県地域史協議会編　1989年

下地安広・松川　章他「城間古墓群」『浦添市文化財調査報告書』1990年3月

「銘苅古墓群（南地区）」『埋蔵文化財発掘ニュースNo.1』那覇市教育委員会1992年1月

図　　版

上：北側より

中：北東側より

下：南西側より

図版 2　遺跡近景

上：第１・２号遺構前

中：第１号遺構実測

下：第３号遺構前

図版３　発掘風景

上：第１号遺構

中：第１号遺構前庭

下：第２号遺構

図版４　遺構完掘状況

上：正面

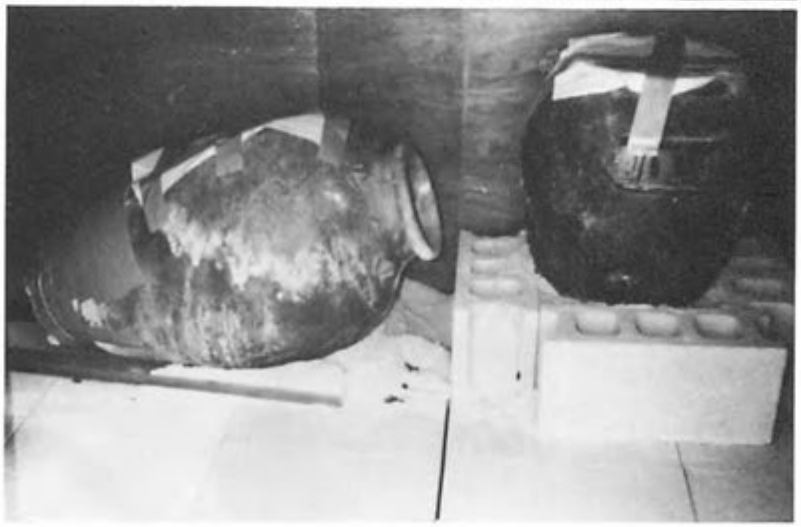
中：1号集石

下：2号集石

図版5　第3号遺構

上：正面

中：右奥壁



下：仮安置所

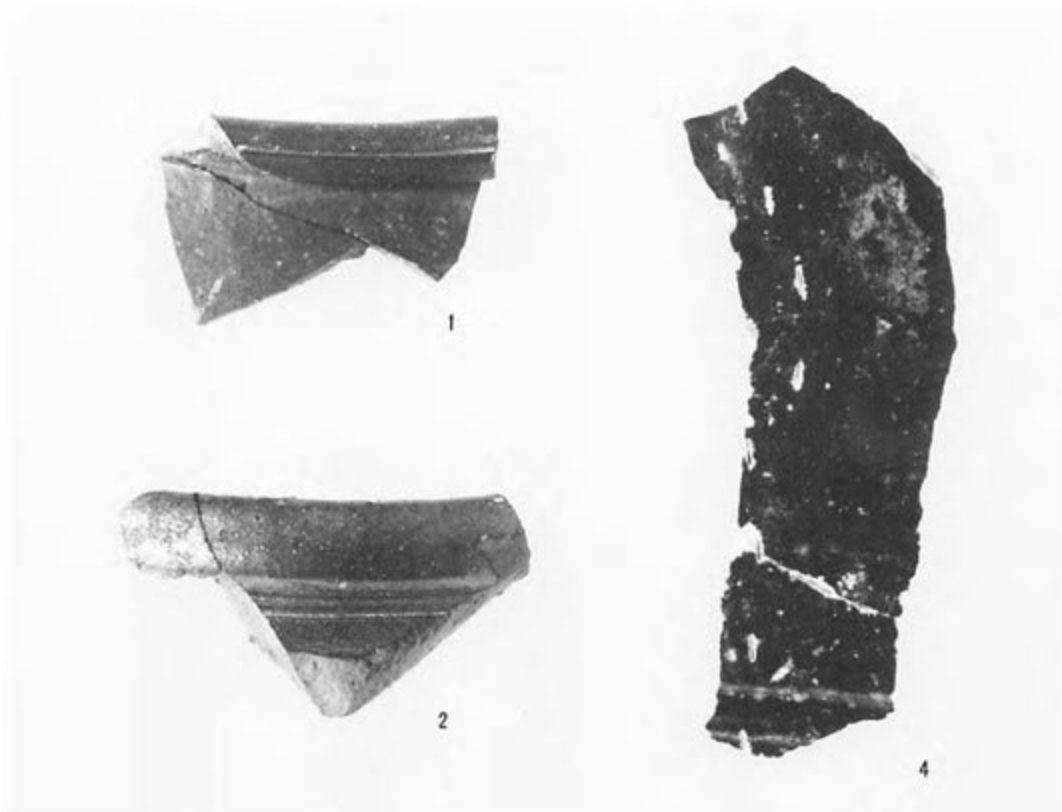
図版 6　第 3 号遺構内室　発見時の状況

上：正面

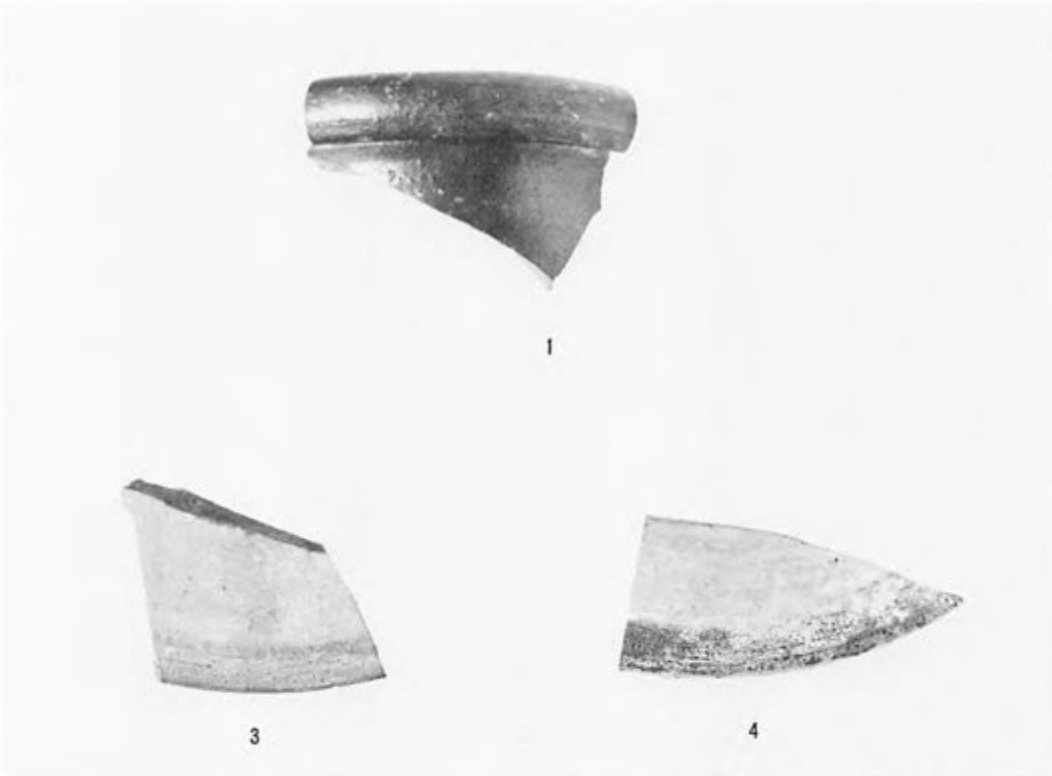
中：右奥壁

下：墓口

図版7　第3号遺構内室

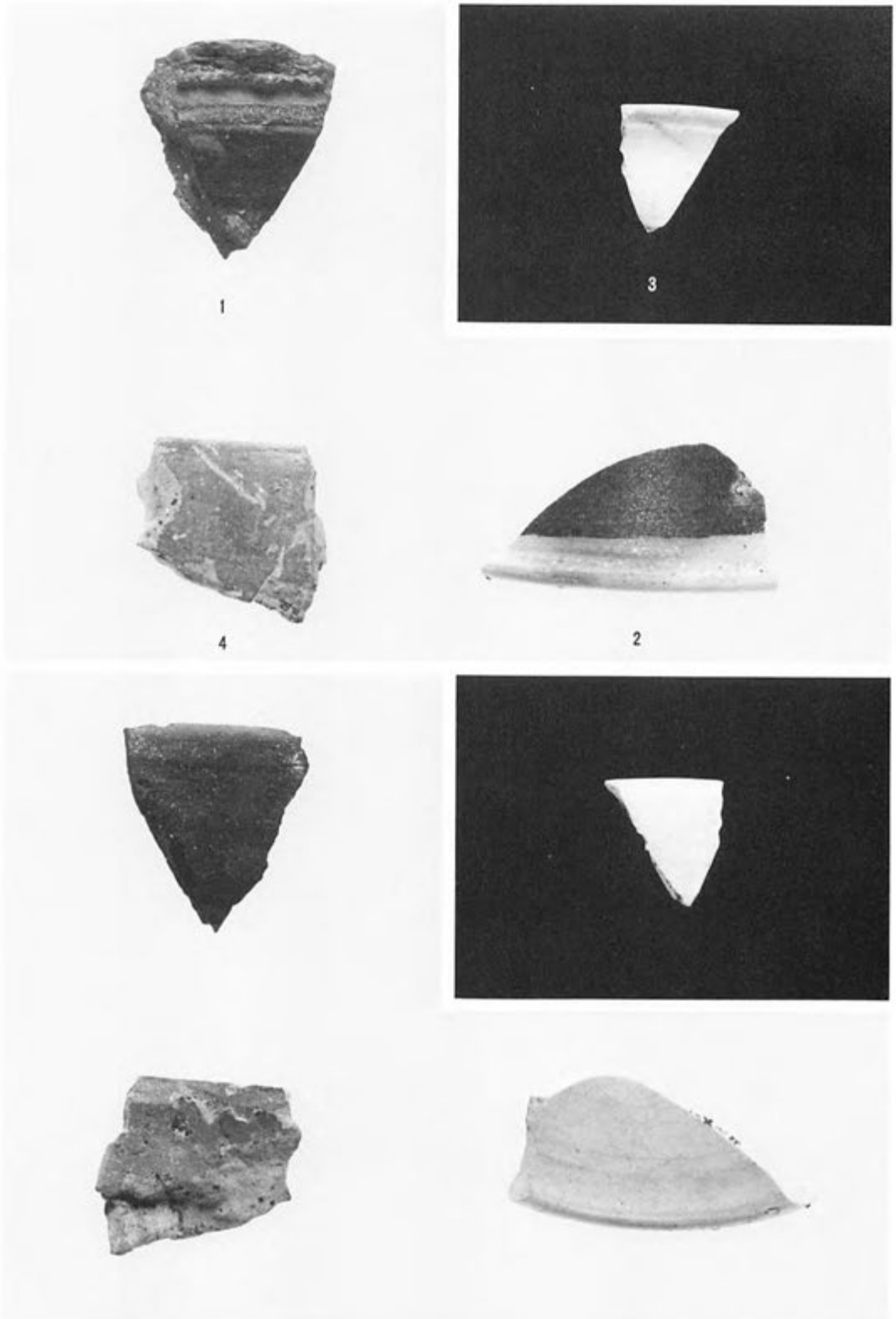


図版8（第10図）第1号遺構A：甕（1）、納骨器（2・3）、褐釉陶器（4）

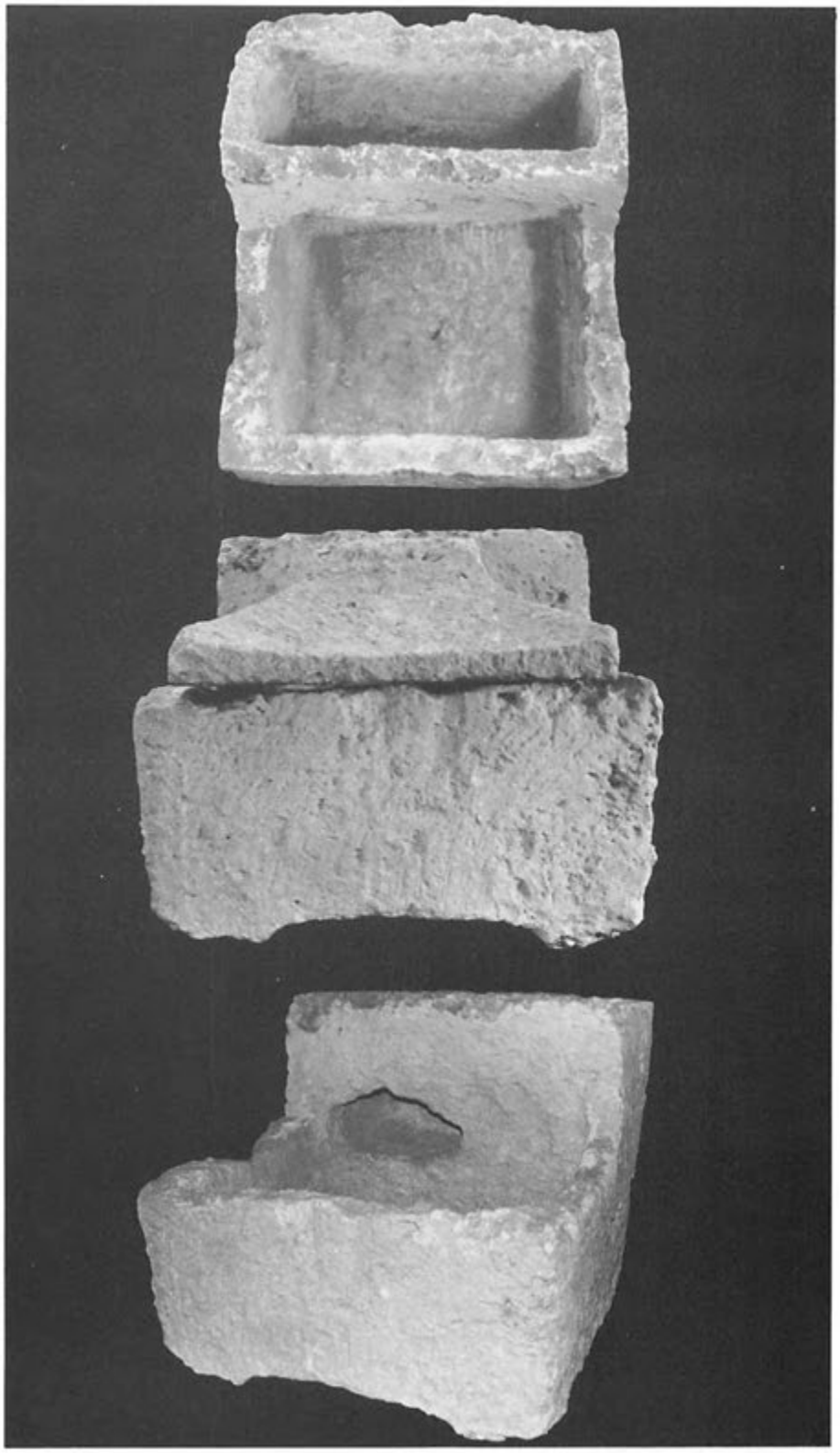


図版９（第11図）第１号遺構Ａ：壺（１）、納骨器の蓋（２～４）

図版10（第12図）第１号遺構Ａ：赤瓦（１・２）、石製品（３）



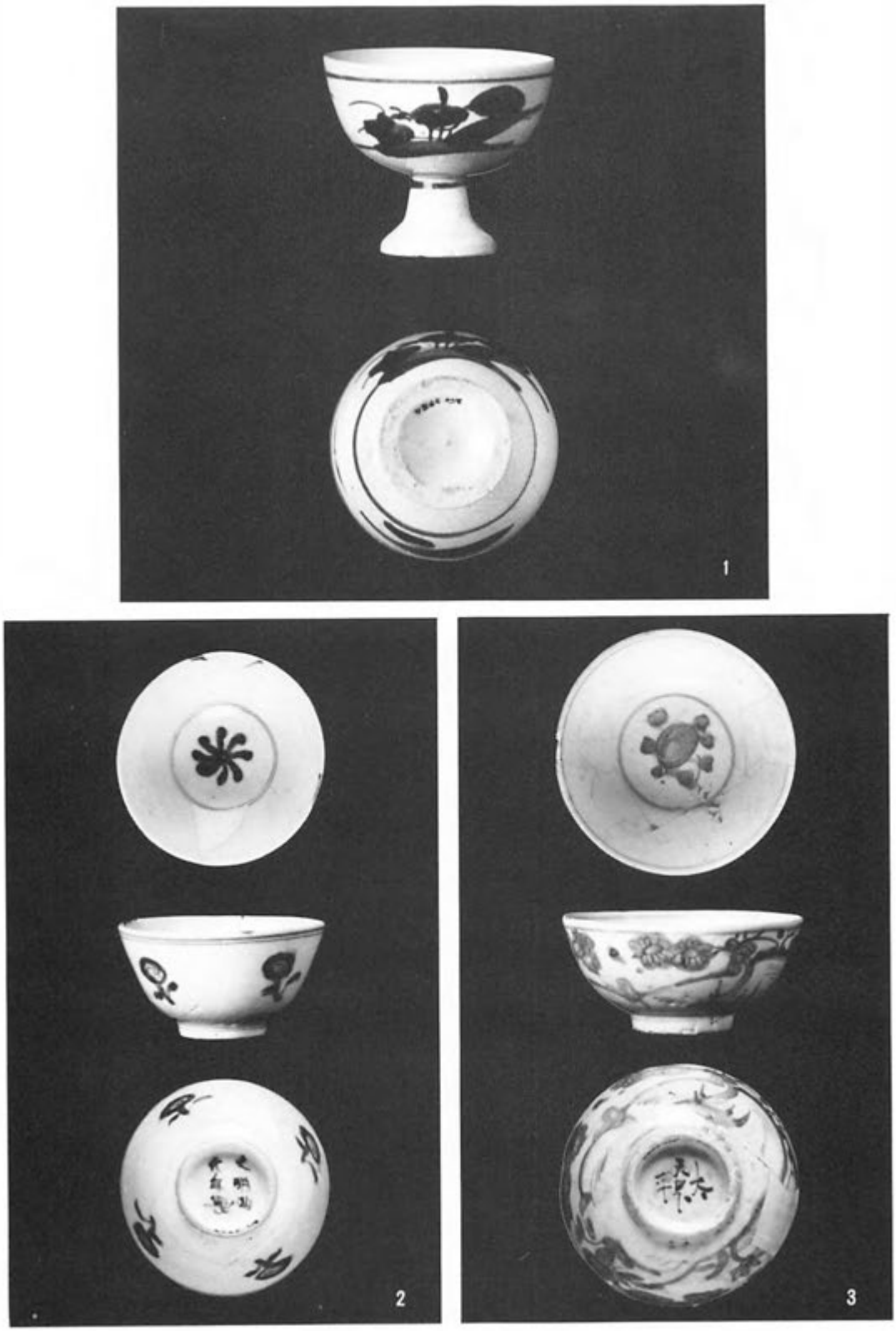
図版11（第13図）第１号遺構Ｂ：鉢（１）、瓶（２）、碗（３）、第２号遺構：鉢（４）



図版12（第17図）第３号遺構：納骨器（石棺）

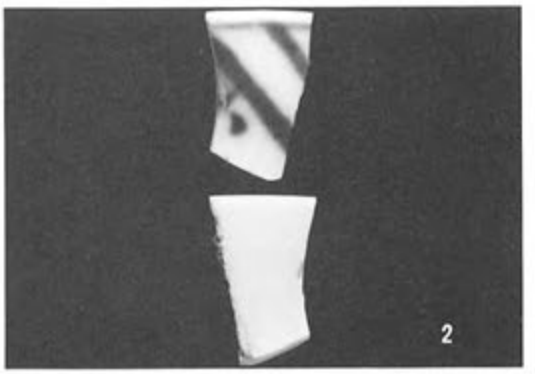
図版13　第３号遺構：上（第18図）甕
下（第20図）鉢

図版14（第19図）第３号遺構：土器（１）、器種不明（２）、蓋（３）、水注（４）



図版15（第21図）第３号遺構：仏飯器（１）、小碗（２）、碗（３）

1



2

3

4

図版16（第22図）第３号遺構：碗（１・２）、甕（３）、底部（４）

図版17（第23図）第３号遺構：石碑

那覇市文化財調査報告書第25集

安謝西原古墓群

― 安謝高架橋立体化工事に伴う緊急発掘調査報告書 ―

発行　1993年3月
那覇市教育委員会
〒900 沖縄県那覇市樋川 2-8-8
編集　那覇市教育委員会文化課
TEL 098-853-5775
印刷　株式会社　南西印刷
〒903 那覇市首里石嶺町 1-127
TEL 098-884-4321